

平成 30 年度文部科学省委託事業

30 文科生第 322 号

報告書

『生涯学習施策に関する調査研究～グローバルな人材育成に質
する国際協働型プロジェクトの効果に関する調査～』

委託期間 平成 30 年 7 月 24 日～平成 30 年 3 月 31 日

平成 31 年 3 月

OECD 日本イノベーション教育ネットワーク

目次

第1章 調査研究の概要

1-1. 調査研究の趣旨	2
1-2. 調査研究の概要	2
1-3. 研究推進体制と研究成果等の発信	2
1-4. 調査研究の成果と今後の課題	3
1-5. 本書の構成と委託事業の総括評価	8

第2章 グローカルな人材育成に資する国際協働型プロジェクト学習に取り組んできた ISN1.0 生徒の追跡調査

2-1. 本報告書の概要と目的	12
2-2. 追跡調査の方法	12
2-2-1. 質問紙調査	12
2-2-2. インタビュー調査	13
2-2-3. 分析の視点と方法	13
2-3. 結果と考察	14
2-3-1 国際協働と生徒の成長	14
a. レジリエンス得点と国際交流・協働との関係	14
b. 海外生徒との交流による課題意識の形成	16
c. 海外との交流による Agency の芽生え	17
d. 国際協働による進路への影響	18
e. 海外生徒との比較	19
2-3-2. ISN2.0 に向けての生徒の声	20
a. 後輩に向けたアドバイス	20
b. 教員や企業、大学生へのフィードバック	21
2-3-3. 生徒の Agency の萌芽	23
a. ISN での経験を生かした個人による周囲への働きかけ	23
b. チームによる学校や地域への働きかけ	24
c. ISN の活動による進路変更	25
2-4. 本報告書のまとめ	27

資料. 質問紙調査における ISN2.0 に向けた生徒からのフィードバック	30
---------------------------------------	----

第3章 OECD の Education2030 と連携しながら推進する ISN2.0 の国際協働型プロジェクト学習の実践：2018 年度 ISN2.0 ポートフォリオ研究

3-1. はじめに	40
3-2. 事例として取りあげた国際協働型プロジェクト	40
3-2-1. マレーシアとの国際協働型プロジェクトと着想に至った経緯	40
3-2-2. 国際協働型プロジェクトのプロセス	41

3-3. 本活動におけるポートフォリオの利用.....	43
3-4. 本研究（本稿）のリサーチクエスションと研究デザイン.....	43
3-4-1. リサーチクエスション.....	43
3-4-2. 研究デザイン.....	44
3-4-3. 研究方法（データ収集）.....	44
3-4-4. 分析・考察の方法.....	45
3-5. 簡易分析結果と考察.....	45
3-5-1. RLA 1～2回目における生徒の学びに関する簡易分析の結果.....	45
3-5-2. RLA 受講生に対する質問紙調査の結果.....	46
3-5-3. 考察：本実践における学びを促すための質問項目.....	47
3-6. 課題と展望.....	48

第 1 章

調査研究の概要

1-1 調査研究の趣旨

本調査研究は、中等教育段階における国際協働型プロジェクト学習が、生徒の資質能力育成に及ぼす効果を追跡的に調査検討をすることを目的とする。社会に開かれた教育課程として、生徒が主体的に課題設定を地域の課題にもとづき設定し、探究学習に取り組む中で国際協働を行うことが、どのように生徒自身の経験として意味を持つのか、何を育てるのかを明らかにすることが調査研究の目的である。

そして影響を直後だけではなく、より中長期的にもつ影響や効果を含め検討すること、特定地域の大学だけではなく全国の複数の大学研究者が協働して解明することが本調査研究の特色となる。

1-2 調査研究の概要

本調査研究は、以下の2つの調査内容を対象とする。

- a) グローカルな人材育成に資する国際協働型プロジェクト学習に取り組んできた「地方創生イノベーションスクール 2030 第1期 (ISN1.0)」生徒の追跡調査（中長期的な効果検証）
- b) OECD の Education2030 と連携しながら推進する「地方創生イノベーションスクール 2030 第2期 (ISN2.0)」の国際協働型プロジェクト学習の実践（短期的な効果検証）

本報告書では、上記 a)b) で収集したデータの分析結果をまとめ、その分析結果に基づく教師、研究者、ISN1.0 卒業生、ISN2.0 生徒等による ISN 研究会議での議論から、学校や地域レベルで国際協働型探究学習実施における取組の課題点の抽出と、課題解決に向けての展望をまとめる。また OECD Education2030 がその学習の枠組み（フレームワーク）の中で提唱している概念を具体化した学びの映像をまとめ、a)b) の本研究結果の発展形としての、OECD Education2030 フレームワークの概念に沿った形での、来年度の研究計画をまとめる。

1-3 研究推進体制と研究成果等の発信

本調査研究は、ISN 事務局が東京大学を代表窓口とする大学コンソーシアムとして、ISN に参加する全国にいる研究者がチームを組織して推進する。さらに、ISN1.0 やその前身である OECD 東北スクール（2012-2014 年）の卒業生の協力も得ることにより、可能な限り国際協働型プロジェクト学習を推進する学校現場の負担とならない推進体制を構築した。

また本調査研究の推進にあたっては、ISN と文部科学省との連絡会議で進捗を共有・協議し、その研究成果は、ISN 主催の研究会、OECD Education2030 の国際会議、教育に関わる学会等で発信し、多くの自治体や学校、企業や NPO 等に成果を共有した。加えて、本調査結果は報告

書（日・英）にまとめ、ISNのHP¹掲載している。

1-4. 調査研究の成果と今後の課題

成果の目標

ISN1.0の追跡調査（中長期の効果検証）並びにISN2.0の国際協働型プロジェクト学習の実践調査（短期の効果検証）から、国際協働型プロジェクト学習が生徒に与えた影響・効果を取りまとめ、以下の事柄に関して、報告書（日・英）を取りまとめることを本年度の目標とした。

1. 国際協働型プロジェクト学習を学校で推進する場合の、学校現場が記録するデータのフォーマットと方法
2. データ分析をふまえた実践のノウハウ（例：カリキュラムデザインの原則、教師に求められる資質・心構え、教師を支える学校環境 等）

また、これらの研究結果を踏まえて、研究対象校をさらに広げての2019年度の国際協働型プロジェクト学習の実践研究計画を作成する。

国際協働型プロジェクト学習に取り組んできたISN1.0生徒の追跡調査（中長期的な効果検証）

ISN1.0では、東北・和歌山・福井・広島・島根の各地方の中高生が2030年の社会に向けたグローバルな課題（例：少子高齢化、移民社会、環境問題など）の解決をめざし、アジア（シンガポール、インドネシア、フィリピン、ニュージーランド）、北米（アメリカ）、欧州（ドイツ、エストニア、トルコ）の生徒と協働しながら進める「国際協働型プロジェクト学習」を2年間にわたって実施してきた。そして、2017年8月には、「生徒国際イノベーションフォーラム2017」²を東京で開催し、ISN1.0の全ての参加国の生徒・教師が集まり、その成果を発表した。

本調査では、海外も含むISN1.0参加生徒に質問紙（紙もしくはウェブベース）への回答を依頼し、その質問の中で、2回目以降の追跡調査への協力が可能と回答した生徒に対して、個別のインタビューもしくはディスカッションの場を設定し、継続調査を行った。

質問紙の調査内容は、ISN1.0を通しての出会い・その出会いから受けた影響、多様な他者と協働する力として必要なレジリエンスに関する変化、ISN1.0の最終成果物である生徒宣言（未来を創るのは自分達であるという責任感や主体性を強く示し、そのために必要な力をつけるための教育を受ける・教育を考えることに関しても、主体的に取り組むことを宣言）の実現に向

¹ ISN HP、研究成果：<https://innovativeschools.jp/study/recode/>

² 生徒国際イノベーションフォーラム2017 報告書：https://innovativeschools.jp/archive/international_student_innovation_forum2017/

けての具体的なアクションプラン、ISN2.0に参加する後輩生徒へのアドバイス、ISN1.0を通して関わった教師や大学生、企業など大人の態度や指導法に関するフィードバック、調査時点での進路・将来に向けての考えなどである。

第2回目以後の調査実施に同意する生徒・学生に対して、更に詳しく具体的なナラティブ（物語）を集めるためのインタビューを実施した。このインタビューは、教師や教育関係の仕事に就くことを目指す大学生を組織して実施した。

調査結果は、第2章に示した通りであり、Education2030の動向も視野に、生徒のAgencyの現れやその発達に着目した分析を実施した。具体的には、海外との交流による課題意識の醸成、自己効力感と

Student Agencyの芽生え、つなぐ存在としての大学生の存在の大きさが明らかとなった。また様々な人々との交流を通して、キャリアに対する視野の広がりも見られた。

特にISNの活動を通して育まれたStudent Agencyの発現の芽生えやカタチに関し、以下のような点が見られた。

第一に、個人での挑戦を学校全体に波及させる志向が生まれた点である。第二に、調べ学習で終わるのではなく、課題解決の実行を目指した点である。ISNで身につけた力で社会に働きかけるだけでなく、他者を巻き込み活動のスケールアップを行うことは、Student Agencyの育ちが、Co-Agencyに発展していく流れとして示唆的である。第三に、生徒のアイデンティティとの関連である。ISNの活動を通して、生徒の中で進路に関し大きな変更があったり、自分自身に対する捉え方が変わったりということが生徒の語りに見られた。

これらを踏まえて、どのような場面で生徒のAgencyの芽生えが観測できそうかを抽出し、来年度は、そのような場面を参考にし、生徒のAgencyの育ちをリアルタイムで記録し、分析することによって、プロジェクト学習による学習効果をより正確に把握するとともに、どのような教師の働きかけによって実現できるのかについての調査研究を実施していく。

尚、参考にISN1.0に参加した生徒数名が、OECDの呼びかけたFuture We Wantのパッケージに基づきビデオナラティブを提出した。¹いずれも、望む未来を自分たちの責任で創っていくという意思が込められている。

ISN2.0の国際協働型プロジェクト学習の実践調査（短期的な効果検証）

ISN2.0の参加校の中で、海外パートナー校との交流や協働を早い時期から予定している岡山龍谷高校を対象に、短期的な効果検証を行った。

具体的な調査内容としては、研究校として2018年2月よりISN2.0に加盟している岡山龍谷高

¹ 研究成果 Future We Want: <https://innovativeschools.jp/study/recode/>

等学校がマレーシアとの協働目指した RLA（Ryukoku Liberal Arts）の実践を取り上げ、そこでの生徒の学びを分析することを通して今後ポートフォリオにどのような情報を記録していくことで学びの可視化に繋がるのかを考察した。また今年度はポートフォリオに加えて、実行委員生徒へのインタビュー調査と RLA 受講生への質問紙調査の 2 種類のデータを収集した。

調査結果は、第 3 章に示した通りであり、生徒の「マレーシア渡航に対する直接的／間接的興味関心」と「教師による熱心な企画参加への促し」が本事例における学びのはじまりになっていた可能性がある。また RLA の特徴(実行委員が教師と授業を計画し、実行委員が授業のファシリテーションを行う)の「教師との協働による学びのオーナーシップの自覚」と「実行委員以外の生徒との協働による学びのオーナーシップの自覚」を通して「未経験や不得手」を乗り越えていった可能性があると考えられる。

また生徒は教師を They として捉えるのではなく、We として捉えている。ポートフォリオ上の問いかけにおいて、教師が意図していること、仲間を含めた自分たちがやりたいことを相互に記述・比較することで、学びのオーナーシップに関する自覚が生まれる可能性があると言える。

来年度は、収集したデータの分析を続けると共に、実際にポートフォリオ上の問いかけを修正し、より有効なデータのフォーマットと方法を継続して調査研究していく。

尚、参考として、岡山龍谷高校の R L A の実践ビデオは日英が作成され、英語は OECD に提出、また日本語は I S N の H P に掲載¹され、学びあいに活用されている。

ISN 研究会議

ISN では、2018 年 8 月、12 月、2019 年 3 月に、ISN 参加校の実践と研究の進捗を報告しあう、ISN 研究会議を開催し、追跡調査の進捗報告や、ポートフォリオ研究に関して、参加校、研究者とともに協議を行った。

第 1 回 ISN 研究会議:

8 月 20-21 日岡山龍谷高校（岡山県笠岡市）で開催。5 月に開催された Education2030 IWG(Informal Working Group)での議論・フレームワークの共有、ISN1.0 追跡調査に基づいた議論（主にアンケート調査とその分析）を報告し、今後の ISN2.0 各参加校の実践研究のディスカッションを行った。この研究会議に OECD から田熊美保氏（Education2030 のプロジェクトマネージャー）と、ISN アドバイザーでもあり、Education2030 にカリキュラムのコンピテンシー・マッピングを実施しているフィル・ランバート氏、また文部科学省から白井俊氏（文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長）にもご参加いただき、講演とワークショップを実施いただいた。

¹研究成果: <https://innovativeschools.jp/study/recode/>

また本研究会議には、ISN2.0参加の高校生、ISN1.0参加の大学生も参加し、生徒の声を中心とした学びの枠組みを話し合い、OECDからは革新的な研究会議となったことを評価された。これ以降の研究会議でも、生徒、教員、研究者、関係者の多様なステークホルダーでのディスカッションを基本とする構成で、研究会議を実施している。

第2回 ISN 研究会議:

12月22日福井大学(福井県福井市)において開催。10月に開催されたEducation2030 IWG(Informal Working Group)での議論・フレームワークの共有とともに、Education2030のフレームワークに基づいた研究のフレームワークの協議を、試験的に実施した。この中には、追跡調査の発展形である Agency を育む教えと学びの研究と、ポートフォリオによるカリキュラム評価研究は含まれている。

また大学生がファシリテーションを実施する形で、高校生のワークショップも実施された。

第3回 ISN 研究会議:

2019年3月16日東京大学(東京都文京区)、3月17日郁文館グローバル高校(東京都文京区)で開催。

3月16日は文部科学省委託事業報告会として、一般にも公開して開催された。

この研究会議を発表・発信の機会として、本調査研究を報告し、参加した教員、生徒・学生、研究者等が、国際協働型プロジェクト学習の効果と課題に関して話し合った。また Education2030 フェーズ2の動向も視野に、次年度に向けての ISN 研究体制に関して、以下の4つの研究チーム固めを行った。

チーム1: Learning & Teaching for Student Agency (Agency を育む学びと教え)

チーム2: Future We Want

チーム3: Cultivating Transformative Competencies (カリキュラム効果・評価)

チーム4: Curriculum Development & Innovation (カリキュラム開発)

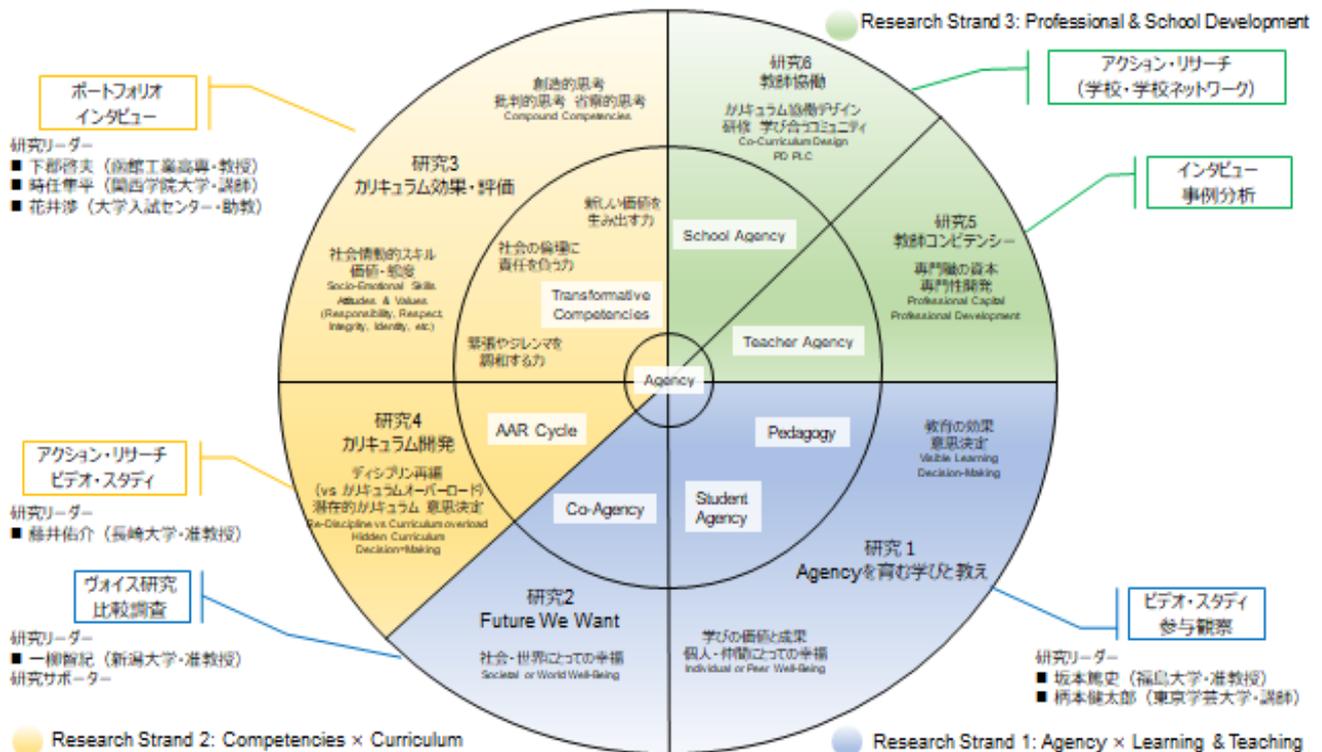


図 1：ISN 研究のフレームワーク(参考)

OECD Education 2030 IWG (Informal Working Group) への貢献

ISN は、OECD Education2030 のスクールネットワークのメンバーとして、Education2030 の国際会議に文部科学省と共に参加し、国際的な教育のフレームワークづくりに貢献してきた。

Education 2030 IWG (Informal Working Group) #7：

5月14-16日にOECD本部(フランス・パリ)で開催されたIWGには、研究統括の秋田喜代美教授(東京大学)、小村俊平(I S N事務局長)、また福井チームから、教員1名、研究者1名、加えて、ISN1.0参加の大学生1名を派遣した。この会議では、日本の実践紹介として、Agencyを育む授業や、AARを3年間にわたって全校生徒で取り組む探究学習の実践ビデオを作成し、海外の参加者に紹介した。

Education 2030 IWG (Informal Working Group) #8

10月29-31日にOECD本部(フランス・パリ)で開催されたIWG(Informal Working Group)には、研究統括の秋田喜代美教授(東京大学)、小村俊平(I S N事務局長)、研究リーダーを務める木村優准教授(福井大学)、またISN2.0参加の高校生2名、ISN1.0参加の大学生1名が参加した。

前回同様ISNの実践ビデオの紹介を行うとともに、木村優准教授の参加により、ISNの研究フレームがEducation2030に沿ったものとなった。また生徒・学生は、議論の報告を全体会議で行うなど、積極的に国際会議の場で議論に参加し、その存在感を示した。

尚、OECD Education2030がそのフレームワークの中で提唱している概念を具体化した実践映像

(Teaching and Learning Experience)に関して、ISNからは7本が提出された。このうち4本は既に日本語版が作成され、ISNのホームページ¹に掲載しており、今後の参加校間での学びあいを使用していく。

1-5. 本書の構成と委託事業の総括評価

本書の構成

本報告書では、第2章で「グローバルな人材育成に資する国際協働型プロジェクト学習に取り組んできたISN1.0生徒の追跡調査」、第3章で「OECDのEducation2030と連携しながら推進するISN2.0の国際協働型プロジェクト学習の実践：2018年度ISN2.0ポートフォリオ研究報告書」の2つの調査報告を示している。2つの調査を通じて次のような総括評価に至った。

委託事業の総括評価

文責 秋田喜代美

本委託事業は、計画通りに実施された。国際協働型PBL（プロジェクトベース学習）の効果研究として、先例のない追跡調査であるために、探索的な形の中で、長期的な効果と短期的な効果の両面を捉え、その効果の可能性を示唆した初の試みとすることができる。国内外での総合学習や教科での探究学習に関しては、その実践が学力テスト等の得点等に影響を与える結果等はすでに記されてきている。これに対して、本調査研究の意義は3点あると考えられる。第1にグローバル化時代にむけて探究学習というだけではなく

国際協働をその活動の中に含む学習の効果研究であること、また第2に従来型のテストで測定可能な学力ではなく、この調査で焦点を置いたのは、OECDのE2030で育成しようとしているAgencyを始めとするコンピテンシや、新たに求められる資質能力として、文部科学省の新学習指導要領でも求めている、主体性や非認知能力、社会情動的スキル、個人の将来展望やキャリアを見据えたアイデンティティ形成という側面での成果や効果を捉えようとしたアクションリサーチであること、そして第3に、従来の調査が直後の短期的な効果に焦点が当てられることが多かったのに対して、本調査研究では、年単位での長期的なスパンでの効果と、実際に同時進行で進むプロジェクトの中での学びの過程における短期的効果を捉えようとした点の特徴である。あらかじめ研究者が設定した調査項目での質問紙等を成果指標とするだけでなく、経験をした生徒自身の生の声を彼ら自身の経験の意味づけとして具体的に整理したこと、ポートフォリオをもとにして学びの過程と実践分析を時系列的に行ったことなど、効果を解明する方法論においても独自の試みを行った。そのことで、よりアクチュアルで現実の生徒の生の姿や声を明らかにした点、学習の主体である生徒側からの把握を試みた点に独自性があると考えられる。

また従来の調査研究では、外部からの研究者が調査を行ってまとめることが多い。それに対して今回の長期的な側面の効果に関しては、自らも国際協働探究PBLを経験したことのある大

¹研究成果：<https://innovativeschools.jp/study/recode/>

学生による高校生へのインタビューを実施したことによって、高校生の本音を引き出したこと、また短期的な成果においても、研究者と高校等の間においてもあらかじめ知己の関係性の中で実践を理解し支援する関係の中で得た結果であることから、学校やプロジェクトの文脈情報を踏まえた解釈がなされているといった点にも意味がある。

ただしそのことは一方で、個別性、多様性を大事にしたために、かならずしも説得的で一貫した数量的な結果を得られたわけではなく、この両者の調査研究だけで明確に成果を明らかにできると言い切ることはできない。この点は今後さらに研究を進めていく上では検討を必要とする点であると考えられる。

また OECD の Education 2030 のプロジェクトとの交流のもとで本研究は実施された。その国際プロジェクトも同時進行で生成的に進行するプロジェクトであるため、ビデオ作製などについての着想も、当初から計画された物ではなく当該プロジェクトの進行過程の中で得て補足的に実施作成することになった。今後これらビデオや成果を公開していくことによって、今回の報告書で成果報告を終わりとするのではなく、本成果の幅広いアウトリーチ活動としての社会周知にも努めていきたい。

今回明らかにした内容として、想定している課題のハードルが国際協働型 PBL という高い水準であることが、生徒自身の強い自信や成長の実感につながったこと、文化的に異質性の度合いがより高い人との出会いが生徒に大きな影響を与えている。したがって、プロジェクト学習で生徒に自分と異質な経験をしている海外の人に伝えたい内容を持たせることや、壁を乗り越えるレジリエンスを育てることが、国際協働を成功に導くために重要であることが明らかになった点は国際協働型の PBL からの独自の示唆である。いわゆる探究学習と言いながらも調べ学習で終わるということも多い風潮の中で、地域からのグローバルな課題解決の実行を目指すことで、社会に働きかけるだけでなく、他者を巻き込み活動のスケールアップを行うことにより、E2030 がめざす Student Agency の育ちが、一人の主体性だけではなく共同主体性としての Co-Agency に発展していく流れを実際の形として示したと言える。そして ISN の活動から、自分の進路を自主的に変更選択する行動を実際に起こした生徒が複数名いた点でも、特定学力だけではなく生涯学習の視点から見ても、アイデンティティ形成においても大きな影響を国際協働型 PBL はもたらすことを示している。またこれは留学等の経験ではなく、より容易にどの学校や生徒でも実践できる国際 PBL でも一定の効果があることが示唆される。

またさらにこうした個人での効果だけではない。この成果を挑戦として学校全体に波及させる志向性が生まれた点で、学校文化や組織への教育イノベーションの効果があることも指摘できる。

もちろんこれは今回の2つの実践を対象としたことから明らかにされたことであり、安定的にこの効果が保障できるかは、さらにさまざまな学校へのスケールアップ（規模拡張）しての検証が必要である。またそのために研究としても成果指標のより厳格化も求められよう。今後は、国際協働探究のプロセスを分節化し、またデジタルポートフォリオの分析精度等もあげていくことでより詳細に個人差や関与の方略なども同定していく必要がある。それらは残された今後の課題としたい。しかし何よりも実際に生徒も教師も学校も、学びのイノベーションを起こす大きな可能性を示した結果を指摘して本総括としたい。

第2章

グローバルな人材育成に資する
国際協働型プロジェクト学習に取り組んできた
ISN1.0 生徒の追跡調査

福島大学人間発達文化学類

准教授 坂本篤史

2-1. 本報告書の概要と目的

本報告書は、文科省委託事業「生涯学習施策に関する調査研究～グローバルな人材育成に資する国際協働型プロジェクトの効果に関する調査研究～」(～H31年3月31日)による調査結果である。本調査は次の2つから成る。

- ①グローバルな人材育成に資する国際協働型プロジェクト学習に取り組んできた ISN1.0 生徒の追跡調査(中長期的な効果検証)
- ②OECD の Education2030 と連携しながら推進する ISN2.0 の国際協働型プロジェクト学習の実践(短期的な効果検証)の2つの活動の取り組みを、研究対象として、ISN2.0 参加校に協力をいただき、調査を実施する。

本報告書は、①の調査結果に該当する。この調査の目的は、ISN1.0 が、国内・国外双方の生徒のどのような成長に有効だったかを生徒の声から検証し、生徒の視点からのフィードバックを次期プロジェクトである ISN2.0 に活かすことを目的とする。

そのために、本報告書では、特に生徒の Agency の現れやその発達に着目する。OECD の Education 2030 の研究フェイズ1の成果として提示されたラーニングフレームワークにおいて、鍵となるコンピテンシーとして、Agency¹と Co-Agency が示された。ISN1.0 での国際協働型プロジェクト学習において、生徒の Agency がどのように育成されたかを検証することで、ISN2.0 での取り組みや検証のための基礎的な知見を提供できると考える。

その点において、本報告書では、次の3視点に基づき主要な結果を提示する。

第1に、国際協働による生徒の成長の視点である。

第2に、ISN2.0 に向けた生徒自身の声から捉える生徒の成長の視点である。

第3に、ISN1.0 以降の生徒の活動に着目した Agency の発現の視点である。

2-2. 追跡調査の方法

追跡調査は、2段階で実施した。第1に、質問紙調査により、生徒の全体的な傾向を把握した。第2に、質問紙調査を踏まえて、対象を絞ったインタビュー調査により焦点化した掘り下げを行った。

2-2-1. 質問紙調査

調査対象は、ISN1.0 に参加した国内外の生徒全員である。質問紙は、紙ベースと Web ベース

¹ Agency は、「よりよい未来を創造するために責任感を持って社会参画をしていく力」など、その定義や日本語もいろいろ考えられている。OECD から発行されたポジションペーパーの日本語(仮訳)も参照しながら、本報告書では幅広く捉え、生徒の実像と結びつけることで、Agency の概念自体の具体的なイメージの構築を目指す。

教育とスキルの未来: Education 2030 ポジションペーパー仮訳 http://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf

を併用し、期間は、2018年3～11月である。ISN1.0に参加した学校やクラスター事務局等を通じて依頼した。質問紙の回答者は、計71名（国内生徒58名、国外生徒13名）である。

質問紙の項目概要は下記の通りである。

- 1 ISN活動を通して、印象的だった人との出会いや、その後、現在も継続している関わりについて（自由記述）
- 2 エゴレジリエンス尺度（5件法）（畑・小野寺（2013）¹より自己効力感部分を7項目抜粋し一部改変して使用）
- 3 2017年8月の生徒国際イノベーションフォーラム2017で発表された「生徒宣言」の実現に向けて、現在考えていることや、実際に行動していることについて（自由記述）
- 4 「ご自身の経験をふまえて、もし、これからISNの活動に参加する後輩の生徒さんにアドバイスするとしたら、どのようなことを伝えたいですか。」（自由記述）
- 5 ISN活動を通して、先生、企業などの大人たちや大学生たちの姿勢および指導、関わり方について、感想や意見、要望（自由記述）

2-2-2. インタビュー調査

質問紙調査により、今後の追跡調査を可とした生徒を中心に行った。質問紙の調査の結果を元に、より詳細に、生徒自身による語りの収集を行なった。インタビューは対面またはオンラインで行った。生徒の状況に即して過剰な負担とならない配慮し、必要に応じて学校側とも相談しながら慎重に実施した。国内インタビュー調査には、現役大学生2名及びISN1.0に大学生として関わっていた1名（現在は企業勤務）、国内インタビューのフォロー及び海外生徒へのインタビューにISN事務局から1名の協力を得た。主として大学生が実施しているのは、生徒の率直な語りを引き出すために、大学生の役割の重要性が質問紙調査からも明らかになったためである。インタビュー対象者は、計36名であった。（国内28名、国外8名内教員1名含む）

2-2-3. 分析の視点と方法

ISNの活動の特徴が、OECDの新しいラーニングフレームワークに基づき、Student Agencyの育成に向けた取り組みであることから、追跡調査の分析の視点として、Student Agencyの萌芽が見られるデータに着目した。

その結果から、以下の3点で結果を整理する。第一に、国際協働と生徒の成長である。質問紙調査とインタビューの結果から述べる。第二に、ISN2.0に向けた生徒からのフィードバックである。このフィードバックは逆説的にISNでの生徒の育ちを反映している。第三に、ISNでの成長を生かした生徒の取り組みである。特に第三の点から、生徒のAgencyの芽生えや形を明らかにし、ISN2.0での調査研究に向けた具体的示唆を得ることを目指す。以上について、まずは質問紙

¹ 畑潮・小野寺敦子（2013）「Ego-Resiliency尺度（ER89）日本語版作成と信頼性・妥当性の検討」パーソナリティ研究, 22, 37-47.

調査から結果を示し、その解釈に必要な点について、インタビュー調査の結果を加味した。

2-3. 結果と考察

2-3-1. 国際協働と生徒の成長

a. レジリエンス得点と国際交流・協働との関係

国際協働型プロジェクト学習は、生徒にとって様々な困難に自分自身が責任を持って向き合うことが求められる。そうした困難に負けずに乗り越えた経験を踏まえ、レジリエンスに関する数値データを取得した。具体的な質問項目は下記の通りである。

【レジリエンスの成長に関する項目】

ISN 活動を通して、多様な他者と協働する力として、どのような成長があったか教えてください。以下の文章を読んで、それぞれ「1：全くそう思わない」～「5：とてもそう思う」の5段階の中で率直に考え、当てはまる数字の一つに○をつけてください。

- 2-1 失敗するだろうと人から思われている仕事でも、やっていけると思うようになった。
- 2-2 困難な仕事であっても、それにあっただ様な方法をもつようになった。
- 2-3 いやなことでも自分がすべきことには、積極的にかかわるようになった。
- 2-4 一つのことに對して、いろいろな解決方法を試すようになった。
- 2-5 困難な仕事で思いがけない負担がかかっても、何とかやっていけるようになった。
- 2-6 これからする仕事がむずかしそうでも、やっていけると思うようになった。
- 2-7 そのときの状況によって、計画を変えることができると思うようになった。

図1は各項目の平均値をグラフ化したものであり、表1は各項目の標準偏差と度数を示している。

図1 レジリエンス項目の平均得点

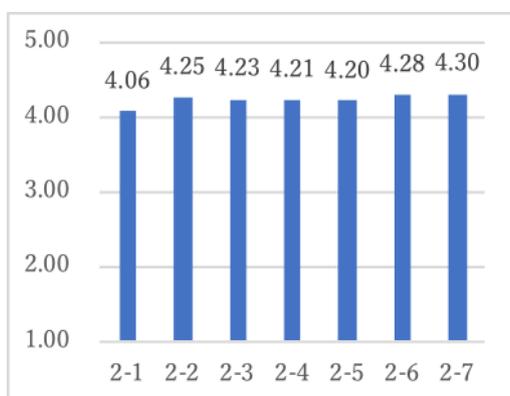


表1 各項目の標準偏差および度数

	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7
SD	0.86	0.75	0.76	0.79	0.71	0.74	0.78
度数							
5	24	30	29	29	25	31	33
4	31	30	30	30	36	30	28
3	12	10	11	10	9	9	8
2	4	1	1	2	1	1	2
1	0	0	0	0	0	0	0

7つの項目全てにおいて、平均値が4.00を超えていた。全体の平均は4.21である。このことは、ISN1.0を終えて、生徒のレジリエンスに関する成長の実感度合

が高いことを示す。なお、項目の中で平均値が最も低く、標準偏差（SD）が最も大きいのは、2-1「失敗するだろうと人から思われている仕事でも、やっていけると思うようになった。」の項目である。「失敗するだろうと人から思われている仕事」の想定について、生徒間で若干の相違がある可能性が考えられる。

質問紙項目の1における生徒の自由記述から、同じクラスター内、他クラスター、地域、大学生、教員（教員を通じた講師等を含む）、海外の人とでコーディングを行なった結果、表1の通り結果が得られた。なお、複数の人物を挙げている場合、同じ属性であれば1以上はカウントせず、異なる属性であればカウントした。

表2 印象に残った人物の分類結果

	同クラスター	他クラスター	地域の人	大学生	企業	教員側	海外
合計	15	21	8	9	4	12	28
割合	21.7%	30.4%	11.6%	13.0%	5.8%	17.4%	40.6%

表2より、他クラスターを挙げた生徒は3割以上、海外を挙げた生徒が4割以上いることがわかる。一方、同クラスターの生徒は2割強であり、活動を進めるにあたって、異なる地域、国の人との出会いが印象的であることが示された。カイ二乗検定の結果、有意な偏りが認められた ($\chi^2(6) = 29.641, p < .01$)。ライアンの名義水準を用いた多重比較の結果から、他クラスターの方が企業より多く、海外の方が地域の人や、大学生、企業より多いことが明らかになった。つまり、より文化的な異質性の度合いが高い人との出会いが生徒の印象に残っているということであり、東北スクールの結果と整合するものと言える。

印象に残った人物との今後については、自由記述から表2に示すように3通りに分かれた。約3割の生徒が、現在も交流していることがわかる。交流が記述されていない生徒もあったが、ここでは交流のあり方について求める自由記述ではないので、あえて記述したということは、積極的に交流している生徒だと考えられる。記述はしていないことが、実際に交流していないことを示すわけではないことに留意したい。

表3 交流の度合

項目	度数	割合
1 特に交流が記述されていない	41	57.75%
2 連絡先はわかる程度のことが記述されている	7	9.86%
3 現在も交流のあることが記述されている	21	29.58%

レジリエンス得点と、現在の交流、印象に残った人物の属性について、関連性を検討した。現在の交流については上記の3通りを交流度合の高さとして1～3

で得点化し、項目1のコーディング結果とレジリエンス特典の相関係数を算出したのが表3である。N=55であり、*:.05水準 †:.10水準で有意であることを示している。

表4 レジリエンス得点と異質な他者の関係

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 同クラスター	1.00								
2 他クラスター	-.04	1.00							
3 地域の人	.03	-.04	1.00						
4 大学生	.00	-.07	.13	1.00					
5 企業	-.13	-.16	-.09	<u>.27*</u>	1.00				
6 教員側	-.06	-.14	.07	.16	.05	1.00			
7 海外	<u>-.22†</u>	-.10	-.02	<u>-.23†</u>	<u>-.21†</u>	-.15	1.00		
8 現在の交流	.09	.07	.07	.08	-.06	-.06	<u>.23†</u>	1.00	
9 レジリエンス得点	.00	.14	.14	-.03	.08	.14	<u>-.27*</u>	.05	1.00

この結果から、大学生が印象的だったと記述する生徒は、企業も同時に挙げていることが分かる。また、国内生徒に限定すれば、教員側との相関も有意であった ($r=.28, p<.05$)。したがって、日本においては、大学生が企業や教員側の人物との間を媒介している可能性が示唆される。一方、海外の生徒との交流と大学生、企業との間に負の傾向が認められた。つまり、海外の生徒との交流については、企業も関与せず、大学生も一歩引くことで、生徒同士の交流を実現させようとしていることが推察できる。

一方、海外生徒が印象的だったと記述した生徒は、同一クラスターの生徒は挙げない高校にあり、現在の交流もしている傾向にあり、レジリエンス得点は低いことが示された。海外生徒が印象に残っていることとレジリエンス得点に負の相関があることについては、海外生徒との交流を積極的に行ったことにより、生徒の視野が広がり、自己評価時の基準が高まった可能性が考えられる。

この点に関し、質問紙調査に続いて実施したインタビュー調査から生徒の実際の声进行分类することで、より詳細に分析を行う。

b. 海外生徒との交流による課題意識の形成

以下に示す国内生徒の語りからは、海外との交流が、海外との交流を諦めているわけではなく、プロジェクト学習を通してレジリエンスが育ったことが後ろ支えとなっていると考えられる。

生徒 X: 教育委員会がコンピテンシーのアンケートをとっていた。それによると、海外に行った直後のアンケートでコンピテンシーが上がったと答える人が多かった。しかし、またしばらくしてアンケートを採ると、いままでと同じ程

度にさがっていた。自分は海外に行った後は、英語が話せない喪失感を感じていたため、その結果との差に驚いた。

生徒 A：自分は逆に焦りを感じた。昔、A 県の「国際機関で働く日本人に会う」研修でオーストリアに行った際に英語ができず失敗したと感じていたため、あまりフォーラムに行きたくなかった。フォーラムでも頑張って話したのだが、通じず「もういいわ」というリアクションをされてとてもショックを感じもつと勉強しないと焦っている。

生徒 B：語学のレベルが高すぎることに。どんなに話しても自分の方が劣っていると感じ、コミュニケーションをさけてしまう、関わるのが怖くなった。

後者の生徒にとって、生徒国際イノベーションフォーラムは、海外の生徒との語学力の差に対して恐怖感を覚えるという心理的に負荷の大きい経験であったことがわかる。しかし、ISN の活動を通して「つけたかった力」として下記の通り語っている。

生徒 B：つけたかった力...英語の語学力：学校教育では、読む、書く、聞くばかりの学びである（特に中高）が、これだけだと実際にコミュニケーション、話をするには厳しい。話す機会が欲しい。

c. 海外との交流による Agency の芽生え

先に示したような記述はむしろ少なく、海外との交流がレジリエンスの育成につながるような語りも多数見られた。以下に抜粋して分析する。まず、海外生徒との積極的な交流を通して、英語への抵抗感がなくなった事例である。

生徒 C：日本語で自分の思っていることを伝えることにさえ苦手意識があるが、その上英語を使うのは難しかった。しかし、英語で話すしかない状況で、苦手だと思いながらもたくさん話したことによって、今では英語に対しての抵抗はなくなった。また、ISN を通じて知り合った海外の生徒と今でも連絡を取っていて、スクールが終わっても繋がっていられることがうれしい。

生徒 D：初めは、コミュニケーションとるのが難しいのかなと思っていた。なんとか挨拶をして必要最低限を話すという感じだった。しかし、そうしているうちに、言葉はツールであって身振り手振りでも伝わるし笑いのツボが同じであり、外国人とって抵抗感を作っているのは自分なんだと気づいた。それぞれに文化などによる価値観の違いはあっても、みんな同じ人間だから「話せばわかる」ところがあると思った。考えていることの共有もできる。偏見をもたずに「同じ地球市民として世界をよくしていこう」と考えられるようになっていった。今でも海外の生徒とは SNS などを通してつながりを持っており、誕生日の際など連絡をとっている。

生徒 E：海外の生徒たちは英語もよくできて差を感じたが、自分は文法がぐちゃぐちゃだったがなんとかリアクションで通じ、度胸がついた。レクの際など、リアクションは万国共通なんだと感じた。

(下線は筆者。以下同様。)

「英語で話すしかない状況で、苦手だと思いつつもたくさん話したこと」により英語で海外の生徒にコミュニケーションをとることへの抵抗感がなくなったという語りや、「言葉はツールであって身振り手振りでも伝わるし笑いのツボが同じであり、外国人とって抵抗感を作っているのは自分なんだと気づいた」、「自分は文法がぐちゃぐちゃだったがなんとかリアクションで通じ、度胸がついた」という語りは、外国語学習への動機づけという点で示唆に富む。外国語教育において生徒の動機づけの問題がしばしば語られているが、抵抗感を学習者自身が創出していることが問題だという生徒の声に即せば、いかにその抵抗感を和らげるか、つまり、海外の人と言語以外でもつながりを持てる可能性を体感することが重要となると考えられる。

また、このように日本語の通じない状況をなんとか乗り越えることでの成長がうかがえる。その後も海外の生徒との交流を維持しているという語りや、「偏見をもたずに『同じ地球市民として世界をよくしていこう』と考えられるようになっていった」という語りからは、このような異文化の壁を乗り越える経験が、グローバル化する社会の課題に関わっていく生徒の Agency の芽生えとなる可能性が示唆される。

生徒 F：海外の人は一生懸命慣れない日本語で説明してくれているのに対し、日本人は英語が出来ないからという理由で諦めてしまうことに気付いた。言葉の違いがあっても頑張って伝えるという気持ちさえあれば伝わるということを学んだ。

「頑張って伝えるという気持ち」が持てるかどうか重要であり、したがって、プロジェクト学習で生徒に海外に伝えたい内容を持たせることや、壁を乗り越えるレジリエンスを育てることが、国際協働を成功に導くために重要かもしれない。

d. 国際協働による進路への影響

国際協働が生徒の自信を育み、進路に影響を与えた事例も見られた。

生徒 G：将来の夢は I S N の前後で変わらず栄養教諭になりたいと思っている。ただフォーラムで他校他国の人と交流してみたら何とかなる！と実感したので、今は(ある大学)の推薦にチャレンジしている。I S N に参加しなければ自己推薦の願書なんか書けなかったし、まずもって推薦にチャレンジしようとは思わなかった。

このように、国際協働が自身の進路に主体的に関わるという意味での Agency 発揮の契機となったことが読み取れる。

以上の語りからは、国際協働によって、自分自身の内なる「壁」を乗り越え、多様な可能性に開かれていくことが、生徒の Agency の発現をもたらす可能性が示唆された。国際協働の中で生徒の視野が広がるのが、レジリエンス得点との負の相関として逆説的に示されていると考えられる。語学力が不足していても、意欲を持ち、何らかのツールを用いて海外の生徒とコミュニケーションをとることが、様々な困難な課題に国際的な連携をもって社会に働きかけていく Co-Agency や、社会に働きかける自分自身の進路を見定める Agency につながるだろう。生徒の語りからは、国際協働が生徒の Agency の芽生えとして有効であることが示唆される。

e. 海外生徒との比較

以上のような異文化交流の際に言語の壁と、その乗り越えに関する語りについて、海外生徒からも同様の語りは得られた。

生徒 H (インドネシア) : 海外の友人たちとコミュニケーションをとるのはとても楽しかった。時々英語力の問題で、彼らの行っているアイデアを理解することができないことあった。特にネイティブの英語話者との会話は難しい。

生徒 I (ドイツ) : 言葉の壁はあったけど、特に難しさは感じなかった。コミュニケーションはジェスチャーでもできる。

「特に難しさは感じなかった」という点は、日本の生徒による語り方とニュアンスが若干異なっている。また、例えば、以下のような語りが得られた。

生徒 J (USA) : 第 2 次世界大戦に関して。日本の視点からの戦争・平和を学んだのは良かった。これはアメリカの授業ではないので、文化的な価値観・違いを乗り越えて、違いを受け入れ、尊重するようになった。また主張するのではなく、議論ができるようになった。

視点の交流については、広島クラスターの生徒も同様のことを話していたようであるが、文化的な価値観の違いの乗り越え、議論ができるようになった、相手を尊重するようになったということは、日本の生徒はあまり明確に語ってはいない。この生徒は、身についた力として下記のようにも語っている。

生徒 J (USA) : 公的に話すスキル (Public speaking skills) がついた。最初は様々な背景を持つ人がどう自分をジャッジするのか不安だった。また、聴くスキルがついた。様々な社会的、政治的背景を持つ人の意見を聞くことができるようになった。

日本の生徒は、英語に対する意識が強く見られたのに対し、海外の生徒は、公的に話すスキルや、他者からどうジャッジされるかについての不安を率直に語っている。異なる文化、価値観を持つ人同士が話し合う際の不安があり、日本の生徒が「壁」として感じているものを一部示して

いるように考えられる。また、異なる文化、価値観を背景に持つ人同士が、対等に話し合うスキルについては、日本の生徒の認識において、英語の能力と、それらのスキルがどのようにつながっているのか、あるいは切断されているのかは今後検証が必要であろう。別の生徒も同様の語りが見られた。国際協働による視野の拡大は、自分自身の国の良さや課題を見出すことにもつながると考えられる。

生徒 K (トルコ) : まず、たくさんの人に会うことによって、ソーシャルスキルを磨くことができた。異なる文化、異なる国、異なる歴史から多くのことを学んだ。同時に、自分自身の国もよりよく分かるようになった。

2-3-2. ISN2.0 に向けての生徒の声

本節では、質問紙調査の中で、ISN2.0 に参加する後輩に向けたアドバイスと企業や教員側へのフィードバックに関し、国内生徒の声を分析することで、ISN2.0 の活動への示唆を得る。

a. 後輩に向けたアドバイス

アドバイスは大きく分けて 2 タイプに分かれた。

第一に、指導的なアドバイスである。これは、「ISN の活動をするにあたっての助言、期待」を示す。例えば、次のような記述である。

- ・英語を話すにあたり失敗を恐れずに、コミュニケーションをとること。
- ・チームの状態がよくないと活動もうまくはいかないのでまずは最高のチームになるようメンバーお互い支えあってほしい。

第二に、提言的なアドバイスである。これは、「ISN の活動を通して何ができるかを示し活動を勧める」記述である。例えば、次のような記述が該当する。

- ・自分が今見えている世界よりものすごく広い世界を見ることができるよ。

まず、指導的なアドバイスに関し、その内容を顕著なフレーズによりコーディングしカテゴリー分け、降順に並べると以下の表になった。なお、1 名のアドバイスに複数のカテゴリーを含んでいる。

表 5 指導的なアドバイスのカテゴリー分析結果

カテゴリー	件数
人とつき合う力、チームでの活動の大切さ	16
話すこと、伝えることで先へ進む	14
ネガティブになったら思い出してほしいこと	10
英語は目的でなく手段	8
失敗を恐れなくて、勇気をもって。限界を決めず、積極的に	9
自分の意見・考えを持つことの大切さ	7
計画を立てたり準備をする際の注意	4
まずは行動することの大切さ	3
勉強や部活との両立について	2

指導的なアドバイスにおいて、特徴的なこととして。そのほとんどがコミュニケーションの大切さをあげている。

全体（58名）に対してどのくらいの人がコミュニケーションの大切さを挙げたかを見ると、回答の半分を超す約6割（34名）に上る。（キーワード例：話すこと、伝えること、手段としての英語、人とつき合う）

例えば、中学生の約三割（6名）は活動中の難しさ、辛さ、できないことがあったことを挙げ、その上でアドバイスをしている点（高校生では同タイプの指摘は5名一割程度）が特徴的であった。

一方、提言的なアドバイス、すなわち「ISNの活動を通して何ができるかを示し活動を勧める」記述についての内容は以下のようなものが見られた。

「成長できる」（4件）

例：「1人ではなく、みんなでことを終えたとき、私は言葉で表せないくらい、今まで味わったことがないくらい満ち足りた気持ちになりました。全てうまくいなくても、それも成長に繋がればという考え方ができるようになったことが私にとって大きな成長です。」

その他も、成長に関する具体的な中身が多い。

「視野を広げられる。そのことで、見たことのなかった世界を知ることができる」（2件）

b. 教員や企業、大学生へのフィードバック

次に、教員や企業、大学生へのフィードバックについて、質問紙調査の自由記述項目から検討した。

生徒から最も多く寄せられた意見は、大人や大学生から「生徒が主体になれるようなサポートや支え」があったことを好評価・重要視するコメントである（19件。具体的な記述のある回答4

2件に対して半数に近い)。それに対する感謝の言葉も多くみられる(13件)。大人や学生に対して「最低限の手伝い」であったことを評価したり、「縁の下の力持ち」、「陰ながら」、「知らないところで」動いてくれたなどの言葉にも表れている。

次に、意見が集中しているのは、大人や大学生の生徒へのかかわり方が対等であるかどうか(7名)である。大人と子どもの区別がある場合や「生徒が取り残されて話し合いが進んでしまうこと」は、モチベーションや活動の進行にマイナスに働くので、そうならないようにという要望が寄せられている。

企業の方々に対しては、学校で企業の方の講義をもっと取り入れて欲しいという要望が寄せられており(2件)、企業の方の講義を増やしてほしいと書いた中学生は、理由として、中学生であっても「あまり関係がないと思っていた、世の中の仕組みや現代の社会についても深く考えさせられ、何より興味を持つこと」ができたことを挙げている。

大学生に対しては、より深くかかわる仕組みがあるとよいという要望があった。全体として、大学生についての記述は、冒頭に挙げた生徒を支える姿勢の点から好評価である(8件)。この結果は、先述した大学生が教員や企業の講師とつなげる役割を担っていることと符合する。

このことに関し、ある生徒は次のように大学生の役割を語っている。

生徒 L: (ISN の活動を通して身につけた力として) 自分の気持ちを伝えられるようになった。今までは他人から自分がどう見られているか心配で、人に合わせてばかりだった。できるようになったきっかけは、個性の強い人に出会ったことと、大学生が自分の気持ちを引き出すようなコミュニケーションをとってくれて、自分がどういう人が気づいたから。

() 内は筆者補足

大学生の支援の一例として、生徒たちが教員などの大人には言えないことを、立場の近い大学生に話す活動を通して、立場の異なる人にも自分の意見が言えるようになる、という支援があったと言える。このように大学生が関わることは、Co-Agency の表れとして評価できる。

これらのことより、主体としての生徒を先生や企業の方や大学生が認めることを生徒は好評価しており、さらに、生徒が、大人と子どもが対等な立場でコミュニケーションをとっていると思えるかどうか、生徒のモチベーションや進行を左右する(ひいては目的とする学びを左右する)要因として浮かんだ。

ISN2.0 では大学生 EP を重視し、体制を整えつつある。例えば、ISN1.0 に参加した高校生が、大学生 EP として参加している。その際、ISN で身につけた力を生かしている。

生徒 D: 大学生になってからも ISN 活動を続けたくて ISN2.0 の大学生 EP 発足に携わったこと。元々 ISN に参加していた人だけでなく、大学で出会った人全く経験のないメンバーを巻き込むことができた。

この生徒の語りからは、ISN の活動が、大人の側が用意した枠組みとしてプロジェクト学習を実践するというよりは、その枠組みを利用して、自身で社会をよりよくしていく取り組みにつなげていく、という Agency の萌芽が見られる。この点について、ISN を通して身につけた力が生き

ていることは、この生徒が下記のように語っていることから明らかである。

生徒 D：学校の先生や地域の大人、また身近には後輩など、立場の違う人と、お互いの持つ利害関係や立ち位置の違いを感じながらコミュニケーションをとり行動できるようになった。この人はこの立場だから、こういう考え方になると分析しながら、自分の立場も生かしつつ行動できるようになった。

その他、15 件挙げられた要望の中で上記以外で複数名が挙げた意見には、大人の間および全体でのコミュニケーション不足を指摘し、情報の共有をもっとした方が良かったという意見（4 名）、催事準備や活動期間中にもっとゆとりが欲しいという意見（2 名）があった。

なお、本節で分析対象となった自由記述の全回答は、今後の教育のあり方に向けた生徒からの貴重なフィードバックであるため、末尾に資料として添付した。

2-3-3. 生徒の Agency の萌芽

本節では、インタビュー調査から、Student Agency に関する項目に焦点化して検討する。主に対象となったインタビューでの質問項目は以下の通りである。

【イノベーションに関する質問】

ISN 活動で最後に発表した生徒宣言は、未来を主体的に創っていく意思を明確にうたっています。ISN の活動後、自分で考え、まわりを巻き込んで何か行動をおこしたことがあれば、教えてください。また、これから起こす予定があれば、教えてください。

【進路に関する質問】

今から振り返ってみて、活動の開始前と直後で、自分自身の将来や今後の進路についての考えが変化したことがあったら、教えてください。

ISN1.0 以降の活動に関するインタビュー調査から、個人で何らかの活動を行った生徒を抽出した。その結果、個人の取り組みとして自分の周囲への働きかけを行っている生徒が 2 名、また、自分のキャリア（進路）を ISN の影響で転換した生徒が 4 名見られた。

a. ISN での経験を生かした個人による周囲への働きかけ

個人から周囲へ働きかけた 2 名のうち、まず、生徒 M についてである。現在は高校 1 年生であり、ISN の活動には、中学生の時に参加しており、ISN での活動後、在籍する中学校で、「ISN で受けた影響から、学校をよりよくするため、個人個人で何ができるか考える企画を立案し実行した。はじめは小規模で行ったが、最終的には全校で実施した。」とのことである。

ISN で身につけた力としては、「自分は ISN にリーダーとして参加したのだが、そこでリーダーとしてまとめることと自分の意見を発言することの両方を両立していくことが大事だと分かった。それまではリーダーとしてまとめるときは自分の意見を言うことができず、何か自分の意

見を伝えたいときはチームをまとまりなどに目がいけなかったが、今回の ISN ではその両方を両立することができ、その力が身についたと思う」と語っている。このように、ISN での活動で身につけた力を生かし、生徒が身近な社会である学校に対して自ら働きかけ、個人の企画から全校へと発展させていくことは、Student Agency が発揮された出来事であると考えられる。

次に、生徒 N である。現在は高校 3 年生であり、ISN には高校生の時に参加した。「2018 年 2 月に福島での ISN シンポジウムに参加。他クラスターの生徒と話したことにより、自分たちの PBL が「調べさせられているだけで終わっているのはよくないと思った」と語り、「その課題を解決するにはどうすればよいかまで考えて、それを役場などに提言するのがいいのでは」と考え、他の生徒を巻き込み、学校の部活動でプレゼンを行ったとのことである。生徒 B は、ISN で身につけた力として、次のように語る。「プレゼンをした時に感じたが、疑問に思ったことを調べて終わるのではなく、その課題を解決するために何ができるかまで考えられるようになったこと。」

ISN で課題解決への志向が芽生えたタイミングで、異地域との交流が刺激となり、周囲を巻き込んだ課題解決の実行に向かったと言える。

b. チームによる学校や地域への働きかけ

以上は、個人の動きに着目したが、チームを結成し、社会に影響を与える様々な展開をしている事例が複数見られた。いわば、ISN で育まれた Co-Agency が発揮されている事例である。先述した大学生 EP の活動の他に、福井では、フォーラムに参加した影響により、生徒同士が交流し議論するための基盤となる組織を自分たちで作っていた。

福井の生徒（複数）：フォーラムで生徒が交流する場が大切だと思い、FLIA（フライア）という組織を作った。より多くの生徒が参加できるフォーラムで交流する場を作っている。第一回のフォーラムを福井で行い、「マナビとは何か？」というテーマでなぜ学ぶ？どう学ぶ？を語り合い、ポスターセッションで学習の成果を話し合った。ただ準備の時間が短く、他の人の話を聞くので精一杯だった。

また、福島のふたば未来学園の生徒は、自校のカリキュラムと接続して、地域社会に自ら関わり課題解決を目指した実践を行った。

生徒 O：探究活動での語り部の活動として震災のような悲劇を 2 度と起こさないようにとバスツアーを企画した。広野から楡葉あたりまでの範囲で、メンバーの母校の小学校に行った。このバスツアーは地域の人と一緒に作った面も、自分たちだけで作り上げた面もどちらもある。共同で作った。企業のツアーに語り部として参加することもあった。大学に入ってから何らかの形でこの探究活動は続けていきたいと思っている。

福島では、福島高校生フェスティバルを企画し、実行した。ISN での活動の流れを汲みつつも、リーダーを別の生徒が担当するなどして、組織のあり方も発展させている。

生徒 L：2017 年 11 月に台湾の人を日本に呼び、交流を深めた。2018 年 1 月には台湾に行き、一緒に考えていこうという「協働」を提案した。また、FCN (F-city Creators Network) を結成した。

生徒 B：高校生フェスティバルで、初めてリーダーという立場を経験した。全体を統括する難しさがあり、また、前例がないことだったので、企画を作る過程がわからず大変だった。けど、楽しさの方が上回った。

同じ東北クラスターの中で、気仙沼チームでは観光ツアーを実施した。

生徒 P：若者（大学生や社会人人数人目の人など）をターゲットした一泊二日の観光ツアーを 2018 年 4 月頭に実施した。若者をターゲットにした理由は、若者の発信力、SNS に写真や気になったことをアップすることが多いことに目をつけたから。

また、ドイツのチームは、GGB という法人を立ち上げ、アプリ開発をも行なった。そのアプリは持続可能性の評価を地図上に表示するものである。このように IT を用いた継続的な取り組みは、国内国外の他のチームも具体的かつ積極的ではなかったところである点で興味深い。

生徒 Q & 生徒 I（ドイツ）：ISN から影響を受けて、地元の商店がサステイナブルになるような活動をしている。GGB とうい組織を生徒 Q, 生徒 R, 生徒 S と生徒 I で立ち上げた。4 名とも日本に来たメンバー。法的にも組織されていて、資金調達も実施。

(GGB に関して、インタビュー後のメールのやりとりから)

GGB Stands for Green Guide Bodensee. In germany the lake of Constance is called "Bodensee" so the Name is a mixture between german and english. It basically is an App, like a Map, where You can find Cafés, Restaurants, Shops...etc. And They all have a ranking After their sustainability. At the Moment we just Cover the Area of the lake of Constance but we want to expand the Map in the Future.

Thank You, even though the App is Not finished yet and There Are many points we want to improve About certain things, I think I can say we Are all Very proud of creating this App and having the possibility to work on it in the Future too :)

以上のように社会に積極的に関わっていく面での Agency の芽生えが見られた。

c. ISN の活動による進路変更

ISN の活動から、自分の進路を自主的に変更する行動を実際に起こした生徒は複数いた。

生徒 G：将来の夢は I S N の前後で変わらず栄養教諭になりたいと思っている。ただフォーラムで他校他国の人と交流してみてもやってみたら何とかなる！と実感したので、今は（ある大学）の推薦にチャレンジしている。I S N に参加しなければ自己推薦の願書なんか書けなかったし、まずもって推薦にチャレンジしようとは思わなかった。

生徒 T：高校 2 年生の時は特に進路について考えていなかったが、フォーラムではじめて他国の人と交流したのがキッカケで国際関係学部を目指している。

生徒 U：高校の選択時、SGH の指定校を探していた。国際フォーラムで（進学先の高校）を知り、進学したいと思った。当初は（その高校）に関心はなかった。国際フォーラムの時、ポスターセッションが楽しそうな雰囲気であったこと、実際に先輩と話してみても感覚的に（その高校）に行きたいなと思った。イノベーションスクールに参加していなかったら、（その高校）について知ることにはなっただろうから、ISN は大きな影響になった。

いずれの生徒も、生徒国際イノベーションフォーラムをはじめとする国際協働が契機となったと語っている。その際、異校種の生徒や、海外の生徒と実際に話し、交流したことが語られている。生徒の視野の拡大や、異文化の壁を超えた経験が、生徒の Agency をより高めたと言えるのではないだろうか。

一方で、ISN の活動全体を通じた活動によって、自らの進路を変更した生徒も見られた。

生徒 V：とても変わった。参加する前は、地元の国立大学に進学して、地元の小学校教員になろうと思っていた。ISN の活動を初めてすぐ、地元の大学でなく、もっと国際的なことができる大学に進みたいと思うようになっていった。ただ、教育に対する興味は依然としてあり、（ある大学）の国際教育専修に生きたいと早い段階で決まった。かつては小学校の先生になりたいと思っていたが現在は教育系でも教師かどうかはわからない。

生徒 W：変化はあった。将来やりたいことに関して漠然としたものはあったが、高 3 の受験期に I W G などに出て、具体的な目標ができた。将来は国連に行きたいと思っている。

生徒 X：プロジェクトを通して紹介された別のプログラムに参加したり ISN を直接使ったりする進路を選んだ。具体的には ISN に関する論文を書き、推薦受験で〇〇大学を受け進学した。ISN に参加してすぐは先生になりたいと思っていた。結果的に教育に携わると言う事は変わっていないが、現場ではなくもう少し広い視野で教育に携わりたいと思うようになった。広島クラスターは教育委員会が事務局で、そこで様々な先生に出会ったことがきっかけだろう。また、

自然で見られるような能力は ISN で育ったように思う。今の進路の希望としては、教員になりたいと思っている。特に、高校の先生を希望している。そう思う理由は、やはり ISN が影響していて、ある程度基礎が終わった段階の方が探究活動に向いていると思うため高校がいいかなと思っている。多少は中学生でもできると思うが、希望としては高校である。また、ISN を経験しその後も研究しているので、自分のような様々な経験をしていきたい人材が現場にいたほうがいいんじゃないかと思い、教員を志望している。今は、今後教員になって現場で活かせるようなことを考えていきたいと思っている。

生徒 Y：360 度変わった。H I S (Hiroshima Innovation School) では、I T やベンチャーの人にあって、刺激を受けて、そういうことしたいと思ったが、大学に入ってお金のこことかも考えると、自分は安定を求めることが分かった。今は公務員がいいな、と思っている。公務員は H I S の前から思っていたので、そういう意味で 360 度変わったと思う。職業はいっぱいあることを知った。なりたい公務員の仕事の分野は、福祉関係（例：日本にきた難民が制度サービスを受けられるような支援）か観光関係。かっこいい公務員になりたい。（教育委員会の）〇〇先生、〇〇先生みたいなのが、かっこいい、のモデル。

一方、海外生徒の語りからは、認識として視野の広がり等の変化は見られたが、具体的な進路の変化などは明確にはほとんど見られなかった。

2-4. 本報告書のまとめ

以上の結果から、Student Agency に関する仮説について整理する。

追跡調査の質問紙調査結果及びインタビュー結果から、ISN の活動を通して育まれた Student Agency の発現の芽生えやカタチに関し、以下のような点が見られた。

第一に、個人での挑戦を学校全体に波及させる志向が生まれた点である。第二に、調べ学習で終わるのではなく、課題解決の実行を目指した点である。ISN で身につけた力で社会に働きかけるだけでなく、他者を巻き込み活動のスケールアップを行うことは、Student Agency の育ちが、Co-Agency に発展していく流れとして示唆的である。

これらは、OECD のラーニングフレームワークに示された Creating New Value への芽生えとして考えられる。このような生徒の自主的な動きの背景には、フォーラムで異文化の生徒と、言語の壁を乗り越えてコミュニケーションをとった経験や、異地域での実践に触れて、社会に対するアクションを起こすべきという意識の変化があったことなどがある。自分自身で壁を乗り越え、一定の成果を出すことが自己効力感を高めること、また、成果のその先を体現している先行モデルを知ると共に、実際に行動している他者との出会いと交流が、生徒の Agency を育むとすれば、東北スクールで示された異質性の交流の重要性と符合し、本追跡調査で、その具体的な様相が一定程度示されたと言える。また、一部の生徒に、立場を考えて他者と議論することができるよう

になったという語りもあり、Reconciling Tensions & Dilemmas につながる萌芽も見られた。

第三に、生徒のアイデンティティとの関連である。ISN の活動を通して、生徒の中で進路に関し大きな変更があったり、自分自身に対する捉え方が変わったりということが生徒の語りに見られた。生徒が自分自身と社会との関わりを見直し、社会の課題を意識して、自分自身のあり方を捉え直すことは、Taking Responsibility の芽生えとして解釈できる。また、その際に、生徒を支える存在として、身近な他者である大学生の存在の大きさも以上から示された。

これらを踏まえて、どのような場面で生徒の Agency の芽生えが観測できそうか、以下にいくつかの例をあげて、本報告書を閉じる。

- ・生徒が学校を出て、異校種、異地域、異文化の生徒と出会う場面。
- ・学校の外に出て、地域や教育委員会、企業等の大人と出会う場面。
- ・自分たちのコンテンツを持って異質な他者とコミュニケーションをとり、協働しようとする中で、生徒自身が自分の内なる「壁」を乗り越え、視野を広げていく場面。
- ・チームとなった生徒同士が、現実の社会に関わる困難な課題に向けて、時に対立しながらも合意を取りつつ、それぞれの生徒が自分自身の役割を見出しながら協働していく場面。
- ・以上のような場面で、大人に言われたことに従うのではなく、時に反発しながら、自分たちでモチベーションや感情のコントロールもし、多様な他者の支えを得て、自分のやりたいことを実現しようとする場面。

今後は、上記の場面を参考にし、生徒の Agency の育ちをリアルタイムで記録し、分析することによって、プロジェクト学習による学習効果をより正確に把握するとともに、どのような教師の働きかけによって実現できるのかについて明らかにしていくことが望まれる。

謝辞

まずは、ご多忙の中、本調査へのご協力を賜りました生徒の皆様や先生方、ISN1.0各クラスターの関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。また、本報告書をまとめるにあたりまして、OECD日本イノベーション教育ネットワーク(ISN)の先生方や、ISN事務局をはじめ、下記の研究組織に示します通り、多くの方々に研究計画やデータ収集、分析など様々な面で多大なるご協力を賜りました。ここに記しまして厚く感謝の意を表します。

ISN1.0 追跡調査研究組織

- ・ 追跡調査研究リーダー 坂本 篤史 (福島大学 人間発達文化学類)
- ・ EP インタビュアー 富永 貴子 (東北スクール EP、日本女子大学)
岡田 麗央奈 (東北スクール EP、ベネッセコーポレーション)
加藤 優菜 (福島大学)
- ・ ISN 事務局メンバー 三河内 彰子 (ISN 研究コーディネーター、東京大学特任助教)
太田 環 (ISN 事務局次長)

<資料> 質問紙調査における ISN2.0 に向けた生徒からのフィードバック

○生徒に向けたアドバイス

<p>(設問項目) ご自身の経験をふまえて、もし、これから ISN の活動に参加する後輩の生徒さんにアドバイスするとしたら、どのようなことを伝えたいですか。下欄に書いてください。</p>
<p>やる気があればなんでもできるということ</p>
<p>長いスパンで活動をするので、その中できつと辞めたくなくなったり、チームのメンバーにキレたりしそうになると思います。そんな時は 1 人で我慢するよりそれをメンバーに直接話すなり、言いやすい人に言ってから、チーム内で話し合いをするなりして蟠りを解消して行ってほしいです。</p> <p>誰かが我慢しているとチームは上手く回っていきません。チームの状態がよくないと活動もうまくはいかないのでまずは最高のチームになるようメンバーお互い支えあってほしいです。</p>
<p>英語だとしても臆さずに、自分の意見を言葉以外の方法でもいいので伝えられるような勇気と挑戦の心を養ってほしい。</p>
<p>話せば話すだけ新しいアイデアが浮かんでくると思います。まずは互いを知ることから！</p>
<p>英語を話すにあたり失敗を恐れずに、コミュニケーションをとること。</p>
<p>僕はこの活動を通して英語を勉強することの理由を体感しました。英語は目的ではなく、手段です。そのことを理解した上で活動に参加してみれば新たな出会いが増え、さまざまな意見を取り入れ、視野を大きく広げられると思います。自分が今まで見たことのない世界を知ることができるので是非積極的に取り組んでください。</p>
<p>中途半端にやめた人間からひとつだけ、やるなら全力で。ISN と勉学、部活の鼎立はとんでもないスペックが要求される。だからといって、勉学を疎かにしろとか部活をやめろと言いたいのではない。ただ、やるなら全力で。</p>
<p>活動の中では、とにかく視野を広くして物事を考えてほしいと思っています。『これを実現させるためにはこんな方法もある』という、たくさんの可能性を見つけ出せるからです。しかし、自分一人では、その視野を広げることが難しいと思います。そんなときは、周りの仲間やたくさんの大人と、話をしてみてください。自分では思いつかなかったことに気がつくことができます。それを繰り返していくうちに、自然と視野は広がります。色々なことに興味を持って、たくさんの挑戦・経験をしてください。</p>
<p>不可能だという思い込みはいったん捨て去って、この活動をしている最中だけでも、自由に思ったことを発言してほしいです。</p>
<p>建設的な批判を恐れず、出会いやご縁を大切に、とにかくたくさん失敗してほしいです。必ず見てくれている人はいます。</p> <p>伝えなければ、思っていないのと同じだということも心に留めておいてほしいです。</p>

失敗したらどうしようとか、みんなの前で話すのが怖いなど思わず、積極的に自分の考えを話してみてください。どんなときも前向きに行動していれば、自然とみんなもついてきてくれるはずです。頑張ってください！
コミュニケーション能力が、いろんな場面で1番大切だと思うので、人と関わることを大事にしたらいと思う。
やりたくないと思ったらやめた方がいい。そして、また新しいことを始めればいい。
<ul style="list-style-type: none"> ・地元の良さ、課題を発見できること。 ・地元にとっても貢献できる活動だということ。 ・市内だけでなく県外、海外の方とも関わるができる貴重な経験だということ。 ・大変なこともあるが、絶対にやって良かったと思えること。
難しいこともたくさんあって悲観的になることもあると思いますが、自分の所属チームのメンバーやほかのチーム、クラスターの人をたくさん頼れば何とかなることもあると思います。
最初は自分自身、全く話せなくて、内容を理解した上で自分の意見を言う事ができなかった。でも、学校の理科や社会で習う社会問題や環境問題に自分から興味を持ったり、日本や海外のニュースを日頃から見るようにしたりするなど、生活の中のちょっとしたものから知識を得ることがまずは大切である。だから、さまざまな情報や知識から、自分の意見を持つ時のヒントを探せば、活動中も積極的に意見が言えると思う。
できるか、できないか、実現可能性を考える前にとりあえずやってみる、ということが重要だと思う。自分に限界を決めず、積極的に活動してほしい。
どんな小さなことでも一つ一つが大事ということ
自分には向いていないかもしれないと思っても、周りの大人たちにアドバイスを求めたりすることで必ずやり遂げることができるから諦めないで続けてほしい。英語力がないという理由で海外生徒と関わらないのはもったいないから、単語でも、絵でも伝えられる手段を見つけて積極的に関わってほしい。
失敗を恐れずに何事も実行すること
勉強との両立が難しいが絶対役に立つ、自分に自信がもてるようになる。
やって損はなくとてもやりがいがある活動です。最初は辛くてもどんどん楽しくなっていくきます。
どんなに小さなことも大きなことも、“つぶやき”を大切にしてください。そこにヒントが隠れています。なぜなら、つぶやきには自分の思いが詰まっているからです。
この活動を通して自分の住む街がどんな街なのか、日本や世界の中高生たちの活気はどれほどのものなのかを肌で感じてください！
最初はやってみようかなという気持ちだけでここまでの活動にしてくれました。辛いなと思う部分もあったけれど自分だけじゃなくて世界の様々なところに仲間がいること、近くの仲間がいることで乗り越えられました。友達と意見を出し合ったり活動するのはとても楽しいことです。私もこの活動を通して様々な経験ができ成長できました。
謙虚にならずに積極的に意見を出し、話し合いを何回も行うことが必要だと思う。分からないことや知らないことはなるべく仲間に聞いて、グループ内で情報を全員が正しく知っていることも大事だと思う。計画や準備は細かく立てておいた方がいいが、予想外

のことが起きても対応できる力を付けておいた方がいいと思った。外国の方とコミュニケーションをとるときは、正しい英語を無理して話すより単語だけでもジェスチャーを交えてみると伝わるが多かった。

他の人と意見がぶつかってしまっても、落ち着いて互いの意見の良いところを考え、話し合うことです。始めは難しいと思いますし、自分の意見を使って欲しいという気持ちも分かります。しかし、そんな時こそ相手の意見を尊重するんです。相手の意見と自分の意見の良いところを組み合わせるとより良い意見がでるかもしれません。良い話し合いをするには活発に意見を出すことも大切ですが、たまには冷静になって意見をまとめる時間を作りましょう。言葉では難しいと感じてしまうかもしれませんが、やってみると簡単です。話し合いが止まったときは思い出してみてください。

- ・ものすごくコミュニケーション能力が大事になる。
- ・会議のときに、できるだけ疑問点や不明確な点などは質問して周囲にしっかりと自分の考えを伝え、話し合いを深めていくと、自分だけで行う作業も行いやすくなる。
- ・先生に仕事を協力してもらおう(連絡など)ときは、先生がそれを忘れていることもあるので、定期的に確認をする必要がある。
- ・話の内容はしっかりとメモしておいた方がいい。
- ・iPadなどのタブレット端末は、画面が割れないような対策が必要。←これ本当大事！お金かかるよ！(場合によっては)

注：割ったことのある人の意見です。本当に焦ります。データ消えます。

- ・仕事は連絡を会って取りやすい人(同じ学校の人とか)と分担する方が効率が良い。

この活動をする前と正に活動をしている時、ひとつの活動を終えたあとの自分は全部違います。着実に変化していくのを自分でも感じます。それにやりきった感を感じるか、やりきれない感を感じるかは自分と向き合った時間、苦しんだ時間、努力した時間と大きく関わっている気がします。1人ではなく、みんなでことを終えたとき、私は言葉で表せないくらい、今まで味わったことがないくらい満ち足りた気持ちになりました。全てうまくいかなかったとしても、それも成長に繋がればという考え方ができるようになったことが私にとって大きな成長です。

やりたいと思うきっかけは小さくても、結果は大きくなって自分に帰ってくると思います。

自分にとって、とても貴重な財産となる活動です。自分を1番成長させることができる。

とりあえず、なんでもやってみること。そして、最後まであきらめないこと。意味のなさそうなことでも、最後までやりきることで何か学べることはある。それはすぐに使えるものじゃないけど、いつか必ず何かに繋がっていくもの。今はそのいつかのための伏線を張り巡らす時期だと思って、いろんなことにアンテナを張って学び続けよう。

やって後悔するよりも、やらずに後悔する方がいい事だということです。まずは行動することが大事だと思うので、色んな葛藤を振り払って、自分の殻を打ち破ることです！

積極的に周りの人やものに関わって欲しい。そうすると、活動で困った時にアドバイスを頂けたり、良き理解者となって助けてくれるかもしれない。

<p>計画はみんなで見通しを持って点てたほうが良い。</p> <p>I S Nの今回のプログラムに参加しなかったら結婚など将来の大きな課題に真剣に取り組むこともなかったと思うし自分の長所短所が見えていい機会でもあると思う。I S Nを通して、自分は何を身に着けたいかや、どうなりたいかをもし明確にしたら、苦しくても継続できる理由の1つになると思う。私はそれをするにはできなかつたが気づくことはできたので、それをムダにしないようにしたい。</p>
<p>単純なことかもしれないけれど、何があっても”あきらめない”でほしいです。私自身、この1年間イノベーションフォーラムの活動をして来て、全然思い通りにならなくて、苦しくて辛くて、辞めたくなる時はありました。でも、一緒にやってきたチームのメンバーの支えなどがあり、最後まであきらめずにやる解けることはできました。また集大成となった生徒国際イノベーションフォーラムでは、自分のやってきたことをたくさんの方に称賛していただき、本用に”ここまでやってきて良かった”と感ずることができました。何よりチームとの絆が深まったことは、目に見えない1番の思い出になると思います。損はしません。今思えば、何もかも本当に高校生活の最高の思い出で、やりとげたことで達成感が生まれ、得たものばかりだったと思います。</p>
<p>諦めない</p>
<p>横の繋がりだけでなく縦の繋がりをつくること。そして、お互いにフォローしあえるようにするのが大切だと思う。</p>
<p>多分第3弾のプロジェクトも「本当にこんなこと出来んの？」と思うような内容になってると思うけど、サポートしてくれるたくさんの人の手を借りながら一生懸命頑張れば絶対にできるから頑張る</p>
<p>やりたいという理由を考えることがきつと迷った時や苦しい時などにぶれない力になると思います。是非いろんなことにチャレンジしてください！</p>
<p>まず英語は単にコミュニケーションの道具ではありますが、ある程度英語能力がないと全然会話が成り立ちません。僕は何回か聞き返しているうちに「もういいよ」と言われたことがあります。これでは言い会話はできません。学校のテストで点を取ることも大切ですが、将来のことを感gなえるとテストのための勉強というよりはコミュニケーションのための重要なツールとして学んでいって欲しいなと思います。そして現地では実際に今まで学んできたことを生かせるように自信を持って参加してください。</p>
<p>コミュニケーションも大切ですが、やはり一番大切なことは、自分の意見・考えというものもしっかりと持っておくことだと思います。もう一つ付け加えるなら、その意見を分かりやすく発信し、かつ周りの人たちと共有し。深めていける力をつけておくといいと思います。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・自分のメールアドレスは持っておいた方が良い。 ・はっきりとした目的をもって参加すること。
<p>事前の準備も大事ですが、それを伝えるためにも、多くの人と会話をすべきだと思います。</p>
<p>言語が異なり、恥ずかしがりやの日本人だと、人と交流することが嫌になると思います。しかし、人には人それぞれの良いところがあるので、ポジティブに活動して下さい。</p>
<p>自分が今見えている世界よりものすごく広い世界を見ることができるよ。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・英語を積極的に勉強し、日常会話程度の英語は話せるように。 ・学年プロジェクトのことや、今後の世界の問題などについて、自分なりの考えを持っておく。
先入観なしに交流や体験を新鮮に感じてほしい。
答えは出ません、自分たちで切り開くのです。たくさん吸収したくさん悩み考え経験することで、切り開くことができます。答えに急がないこと。
英語が得意かどうかではなく主体的に動くことが大事だと思います。積極的に初めての人にも話しかけに行くことより楽しむことができると思うので、挑戦して I S N に参加して良かったと思ってもらいたいです。事前に世界で起きている問題なんか調べておくと自信を持って人と話すことができると思います。
他人任せではなく、“自分でやってみる”、という気持ちを持つことが大切です。そしてまた、それが世の中を変えるために絶対要ると思います。“自発的に行動し主体的に動く”という力を学校で養うべきだと感じました。
私は英語が苦手だったので、この活動を通して少しでも英語が好きになるといいなと思い参加しました。準備期間は 原稿やポスターを作ったり、シンガポールの生徒とスカイプで話したりする時に自分の英語力のなさを改めて痛感しました。東京で過ごした3日間はそれまで以上に 英語だけで 何を言っているか分からないこともたくさんあったけれど、言葉が通じない時はジェスチャーや表情で伝えることで何とか乗り切りました。 この活動に参加した後に、大切だと思ったのは、まずは英語力を磨くことです。英語力があればもっと東京での時間を楽しめただろうと思います。 また、他県や他国の人との会話を楽しむためには コミュニケーション能力も必要だと思いました。
基本的に最も大切なことは「人とつき合う力」なので、他人でも人見知りしないこと、コミュニケーション能力を身につけることがとても大事。たとえどんな言語で話さなくてもはならなくとも、極論情熱や感情がこもってればどうにでもなる。
日常を疑う、課題を見つける、解決策を考える、提案する、、、だけで止まるのではなく実行に移してください。
自分が今取り組んでいることにどのような意味があるのか、どのような目的を持って設計されたプログラムなのか意識しながら活動するメタ的な視点を大切にしてほしいと思います。
先輩たちが受け継いで来たことをそのままやってるだけで満足しないでください。新たなことを一から始めることも大切です。これはとても大変なことで、心が折れそうになるかもしれませんが、しかし、難しい事の方が絶対自分を成長させます。是非頑張ってください。
自分の地域、文化について知見をもっと広めるべき。また、参加する国についてもっと調べておくべきだと思います。共通の話題ができるなどして、よりしっかり交流できると思います。

○教員、企業、大学生の関わり方へのコメント

<p>(設問項目) ISN 活動を通して、先生、企業などの大人たちや大学生たちの姿勢および指導、関わり方について、感想やご意見、ご要望があれば、下欄に書いてください。</p>
<p>周りのスタッフは、生徒が主体となれるよう最低限の手伝いのみだったので私たちのためにもなりました。ありがとうございました。ただ、当日会場準備等すごくバタバタしている様子が見受けられたため、スタッフ内での情報を共有しておいたり、高校生に準備を手伝ってもらってもよかったかなあと思いました。</p>
<p>会議が円滑に進められるよう、沢山の方が動いていてくれて、本当に感謝しかありません。 逆に高校生側からもっと関わりに行くことが足りなかったかなと思います。</p>
<p>生徒の活動をサポートする形で見守って欲しいです。また、活動期間忙しく追われてる部分があったのでもう少しゆとりが欲しかった。</p>
<p>僕の卒業した福井大学教育学部附属義務教育学校は自主協同という校訓を胸に、生徒が主体となって活動しています。先生方は縁の下の力持ちとして生徒のことを支えてくださっています。このような環境で自分の可能性を広げることができたことは、僕にとって素晴らしい体験でした。伸び伸びと成長できるようにするために、より多くの生徒がこういった環境で教育を受けることがとても大切だと思います。</p>
<p>皆さんには大変ご迷惑をおかけしました。心からお詫び申し上げます。と同時に、私と関わってくださった方々に感謝申し上げます。</p>
<p>先生方やたくさんの方々の企業の方々、そして大学生には、大変お世話になりました。ありがとうございました。要望としては、これからの ISN 活動の中にも、企業の方々の講義を取り入れてほしいと思っています。私自身、将来役立つであろう知識を、たくさん教わったからです。また、中学生である自分にはあまり関係がないと思っていた、世の中の仕組みや現代の社会についても深く考えさせられ、何より興味を持つことができました。そのため、今後の活動にも必要だと考えています。</p>
<p>三年という長い間、生徒たちの突拍子もない発想の実現に尽力してくださってとても感謝しています。子供の発想だからと切り捨てず、どう実現するかを考える皆さんのような大人になりたいと思います</p>
<p>はじめの方は、大人と子どもという区別があったように感じ、さらにそのことが、マイナスに働いているように感じていました。 しかし、回を重ね、大人と子どもがぶつかり合う中で、お互いがお互いの良い面を生かしていくことができるようになったと感じています。 しかし、最後の東京フォーラムは少し、うやむやになってしまったように感じたので、もう少し時間をかけて、関係を築いていきたいかったです。</p>
<p>優しく、丁寧に教えていただき、とても良かったです。これからも頑張ってください。</p>
<p>自分たちの知らないところで、大変な仕事をたくさんしてくれていたと思うので、学校の先生やボランティアの大学生には感謝しかなかった。</p>

面白かったです。特徴的でした！
<p>いつも感じていたことは、これまでの活動の中で様々な人に助けられたからこそ、今このようになっているのだと思います。</p> <p>先程話したツアーにしても、大人の方、宣伝していただいた大学生の方、応援してくれた学校の先生など私たちにたくさんの力を貸してくれたみなさんのおかげでここまでくることができました。</p> <p>的確なアドバイスをいつも言っていたので、感謝の言葉しかありません。</p>
<p>地域のために頑張ってる大人の方々が同じくらい熱心に私たちに協力してくださり嬉しかったです。先生や大学生の方々は、ヒントをくれて少しでも私たちが良い気づきができるように導いてくれたり、考えを認めてくれたりと支えていただきとても助けられたと思います。</p>
特にありません
学校では企業などの大人たちと関わる機会が少ないので、学校でもワークショップを行ってほしい
親切でわかりやすかったので、継続してほしい
平等な立場で関わる事が出来てよかった
どんなに小さな声にも耳を傾けていただいたおかげで、自分の意見をはっきりと明確に伝えられるようになりました。
いつも私たちの活動を指導して下さる大人の方々、そして陰ながら1番に支えて下さる大学生の方々、いつも感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます！
大学生や、大人の方にはとてもお世話になっています。その支えがあってこそ今の私たちだと思います。同世代のように気軽に話したり指摘しあったり一緒に楽しく活動できるような関わりだと今後の活動もうまく行くのかなと思います
自分たちで考えても良いアイデアが出ないときにアドバイスやヒントを教えてくれたことが良かった。活動するときは本当に裏で支えてくださったのでありがたいと思った。普段の生活では大学生とは関わりがなかったが、この活動を通して優しく指導してくださり、楽しく交流することができた。
子どもにできない事務などの手続きをはじめ様々なことでサポートしていただきました。大学生のみなさんは年も近く、私たちの兄や姉のような存在でした。困ったことも気軽に相談できたし、普段の生活の中でも一緒に活動する仲間としてたくさんの思い出ができました。先生方も学校の勉強と両立しながら活動できるよう様々なサポートをしてくださいました。台湾の時など、台湾の歴史やコミュニケーションをとるための英語など教えていただいて、活動をスムーズにすることができました。
参加している学校の先生が途中で他の学校に移動になると、参加出来ないことも多く、連絡や、計画などが難しくなるので、できるだけ、機関中は移動にならないようにして欲しいです。
ただ一方的に話したりレクチャーするだけでなく、一緒に悩み、考えてくれたのがとても嬉しかったです。また、私の言葉を最後まで聞いてくれたり、自分の気持ちを言葉にするのが難しすぎてできなかった時、理解しようと沢山話しかけて助けてくれた時がすごく嬉しかったです。

<p>私たちの活動のサポートをたくさんしていただき、ありがとうございました。たくさんの方々のおかげで、自分たちの活動に誇りを持つことができているし、自分を大きく成長させることができたのもこれまで私たちの活動に関わってくださった皆様のおかげです。本当にありがとうございました。</p>
<p>右も左もわからない高校生にこのような学びの場を用意していただき、今まで指導していただきありがとうございました。</p> <p>また、これからの社会を担っていくであろう私たちに期待していただき、資金面や機材面でご支援いただいた企業の皆様本当にありがとうございました。</p> <p>意見があるとすれば、私たちが指示を仰ぐ大人の方々の指導が、人によって異なっていたのである程度共有してほしいと思うことは多々ありました。</p> <p>人によって意見が異なるため、すべて同じようにというのは不可能ですが、最低限の共有を行っておいてもらわないと、議論を一からやりなおさなければいけなくなることがあります。時間が無駄にならないよう、高校生のやる気に負けないぐらいのやる気を関わっている大人の方にも持ってもらいたかったです。</p>
<p>学生スタッフの方々が、親身になって支えて下さり、とても感謝しています。癖のある人(?)も大人の方々の中において、いい刺激になりました。スタッフ全体のバランスがちょうどよかったです。</p>
<p>一番身近でサポートしてくれた先生は生徒たちに任せてくれていた。でも、その裏では色々考えたり、心配したりしていて大変だったと思う。そのおかげで、自分達がやってきたとか自分達で決めることが大切にしていくことができてきた気がする。</p>
<p>奥田先生は、よく私たちの話合いに参加して、意見をくださったたりアドバイスや指摘をいただき、一緒に考えて下さりました。大野さんはたまに顔を出して下さり、進行具合によってアドバイスを下さりました。本当に助かりました。ありがとうございました。</p>
<p>生徒の負担が大きかった気がする</p>
<p>何か活動に関する提案に対して否定から入るのではなく、一度受け止めた上で意見を頂きたいです。大学生のようにサポートをしてくださる方がいるとすごくやりやすかったので、今後もサポートは重要だと思う。</p>
<p>特にないです。企業の人に相談に乗ってもらうなど学校内での活動では味わえない新鮮な経験が出来ましたので。</p>
<p>活動の中で組織体制をしっかりと参加者全員が理解していなかったり、コミュニケーション不足から起きる衝突があったと私は思います。そのため、もっとお互いに理解し合える機会があったらいいなと思いました。また、全体会議で生徒がでることが少なかったり、生徒が取り残されて話し合いが進んでしまうことがありました。生徒が理解せずに物事が進んでしまうことは、モチベーションや活動の進行にも大きく影響することだと考えています。丸投げとは行かずとも、生徒が主体的に話せるようにフォローすることで、次の活動がより良く、参加する生徒の皆さんの為になると思います。</p>
<p>いきなり生徒だけで活動というのはやはり無理があると思うので、まずは先生のサポートだと思います。</p>
<p>中学校や高校の取り組みだけで終わらせるのではなく、大学生がもっと積極的にかかわれるようなシステムがあってもいいと思う。</p>

<p>国内クラスター同士のかかわりがもっとあってもよかったと思う。 各クラスターが確実に連絡を取り合えるシステムが構築されていればなおよかったかなと思う。</p>
<p>大人の方々には、このような交流の場を増やしてほしい。</p>
<p>特にありません。</p>
<p>私たちが開こうと思っている国際フォーラムにおいて、ご意見や、その課程で何か協力をお願いした場合は、私たちの力になって下さることをお願いいたします。</p>
<p>特にありません。</p>
<p>もっと積極的に関わりたい。生徒主体ってのは大人が関わらないんじゃなく、大人も生徒も議論は同じテーブルで、ということではないのかな。</p>
<p>私たちが困った時に、詰まった点を整理し打破するために拡散された意見をまとめて下さったのは、とても助かりました！</p>
<p>特に大学生の方と関わったのですがとても親切に指導してくださりとても助かりました。グループでの話し合いの進行役として私に限らず他の人も頼りにしていたと思います。気さくに話してくれてTシャツにメッセージもいただきました。感謝しています。</p>
<p>特になし（基本的に生徒主体）</p>
<p>先生はあまり関わらず極力生徒の力を伸ばすようにしてほしい</p>
<p>指導する側が意図していることを生徒にどの程度明らかにするかを検討するのを感じます。生徒がその中で主体性を発揮する「枠組み」自体を生徒に認識させる工夫が求められるように思います。</p>
<p>生徒の主体性が問われていますが、もっと指導者の皆さんに関わっていただいても良かったのではないかと感じました。</p>

第3章

**OECD の Education2030 と連携しながら推進する
ISN2.0 の国際協働型プロジェクト学習の実践：
2018年度 ISN2.0 ポートフォリオ研究報告書**

依田新（岡山龍谷高等学校）

中山昭（岡山龍谷高等学校）

時任隼平（関西学院大学）

三河内彰子（東京大学）

3-1. はじめに

本稿は、ISN2.0 で取り組んでいる国際協働型プロジェクトの事例において、ポートフォリオの果たす役割について考察することである。具体的には、研究校として2018年2月よりISN2.0に加盟している岡山龍谷高等学校のRLA（Ryukoku Liberal Arts）の実践を取り上げ、そこでの生徒の学びを分析することを通して今後ポートフォリオにどのような情報を記録していくことで学びの可視化に繋がるのかを考察する。

3-2. 事例として取りあげた国際協働型プロジェクト

ISN2.0の研究校の1つである岡山龍谷高等学校は岡山県笠岡市にある全日制の共学校である。普通科と情報科が設置されており、673名の生徒が在籍している。岡山龍谷高等学校（以下、岡山龍谷校）では、これまで生徒が4～5名のグループを作って地域活性化や環境改善等をテーマにプロジェクト学習に取りくむ、Ryukoku Liberal Arts（以下、RLA）に取り組んできた。ここで言うプロジェクト学習とは学習者がチームを組み、様々な社会問題（実社会と繋がりのあるもの）をテーマに設定し、その解決に向けて取り組む教育方法を意味しており、（1）問題の発見（2）他者との共同作業（3）問題の解決（4）第三者への結果の報告の学習プロセスを含むものである（美馬 2009）。本稿で取り上げるのは、その中でも海外との協働活動を取り入れた国際協働型プロジェクトである。2018年度にISN2.0の研究校として指定を受けた岡山龍谷校は、Agency、

Co-Agencyの育成をRLAの目標に設定し、加えてポートフォリオの活用方法の検討とAgencyの評価方法の検証についても取り組んできた。ここでは、それらの取り組みの一部の途中経過を報告する。

3-2-1. マレーシアとの国際協働型プロジェクトと着想に至った経緯

本稿で取り上げるのは、岡山龍谷校のRLAを受講している生徒とマレーシアによる国際協働型プロジェクトの事例である。マレーシアが国際協働のパートナーになった理由は、岡山龍谷校が設置されている岡山県笠岡市とマレーシアの関係性にある。

岡山県笠岡市はマレーシアのコタバル市と友好握手都市を結んでおり、地元の企業や市役所との交流が継続的に行われ2019年現在で20周年を迎える。岡山だけでなく、マレーシアでもクアラルンプールやジョホールバルなどで日系企業や日本人会が中心となって各地で盆踊り大会を開催し、中には数万人を動員しているという報告がある。しかしながら、コタバル市を含めマレーシアの東海岸側では、盆踊り大会は開かれたことはなく、コタバル市の行政機関や日本大使館などがコタバル市での盆踊り大会を希望していることが判明し、岡山龍谷校はプロジェクト学習として展開しているRLAの重要な要素である「（1）問題の発見（2）他者との共同作業（3）問題の解決」を含んでいると判断し、盆踊り大会の企画に名乗り出た。加えて、この企画を現地の高校生と協働で実施することで、生徒がグローバルな視野を学び、平和な社会を構築していく姿勢を持つようになるのではないかと考えた。

3-2-2. 国際協働型プロジェクトのプロセス

表1は2018年4月に始まった本国際協働型プロジェクトの流れを示している。以下、詳細を説明する。

表1 活動の主な流れ

時期	活動内容
4月～5月	説明会，企画書の提出，実行委員の選出，RLA（イベントの企画会議）
6月～7月	イベントが白紙になる RLAの活動再開（マレーシアに関する情報収集）
8月	現地高校とのテレビ会議，SNS上でのコミュニケーション
9月～10月	RLA（イベントに向けての準備）
11月	現地渡航 現地高校生との協働によるイベントの実施

（1）説明会の開催

2018年4月に盆踊り大会の実行委員を募集するために説明会を行い，教員から企画の意図を説明し，実行委員を希望する生徒に企画書を提出するように促した。内容について，主に下記3点を生徒に伝えた。

- ・2018年8月マレーシアケランタン州コタバル市で盆踊り大会を主催する
- ・どのようにしていけば，盆踊り大会を開催できるか，行くまでの計画を作成する
- ・学校側から費用の負担はなく，渡航費を含めてどのように費用を捻出するか

（2）選考

5月のゴールデンウィーク後のメ切日には，約20名の生徒からの応募があった。上記の3項目に沿って書かれているか否かを評価観点に設定し，教職員による書類選考を行った。その結果，4名の生徒が選ばれた。

一次選考後，4名の生徒にはプレゼンテーションを課し，実行委員長と副委員長を選考することになった。その結果，実行委員長（2年），副委員長（1年）が選ばれた。残り2名は実行委員として委員長らをサポートし，その取り組み次第では，コタバルへの渡航が可能になる事を伝えた。

（3）企画の開始

選ばれた4名の生徒と教員で企画会議を行い，どのような内容を行うのか大まかな概要を話し合い，RLAの授業内容を決めた。日常の教科・科目の授業においては，授業は教員主導で行われるものであるが，このRLAでは実行委員らの生徒が先生役を行い，授業を進めていく形式を採用した。教員は最初の授業でRLAの概要を説明し，それ以降は実行委員のサポート役に徹し，生徒の活動を見守りながら，求められた場合適宜アドバイスを行った。



図1 実行委員の会議



図2 実行委員によるファシリテーション

(4) 本格的な活動の開始

【企画】

本格的な活動は、5月から始まった。主に5月～6月のRLAでは、盆踊りを行うだけでなく、日本の夏祭りを体験するようなイベントにしたいという実行委員らの生徒の要望をうけ、盆踊り班、花火班、屋台班、日本文化体験班に分かれて、取り組む内容と実現するための手順について情報収集を開始した。

【マレーシアへの打診】

RLAで話し合った内容を笠岡市の地元企業からコタバル市の担当者に伝えてもらい、開催の打診を行った。しかし、コタバル市からの次のようなイスラム教の教えにそった条例があると返答があり、その内容では開催が難しいということであった。

- ・12歳以上の女性は人前で踊ってはいけない
- ・お祈りの時間は一切、パフォーマンスをしてはいけない

実行委員の生徒たちが企画していたのは、日本各地で行われているようなイベントだったために、この条例（特に女性が踊れない）では、開催できないと判断され、一度イベントの企画を白紙にすることとなった。

ここで開催を諦められない実行委員たちは手紙をコタバル市長に送り、開催の再検討を打診した。その結果、11月にコタバル市、在ペナン総領事館、ロームワコーマレーシア社、国際交流基金などが共催するコタバル日本祭りに招待され、盆踊りの部門を仕切ることとなった。また、盆踊り以外にも、友好握手都市である笠岡市の紹介や若年層に人気である日本のアニメの展示を行うブースを出展することになった。

【現地高校生との交流】

8月になるとマレーシアの高校生との交流が始まった。現地のSMK Tanjung Mas高校とSMK Zainab高校と協働で企画を進めることになり、テレビ会議を行った。そこで決まったイベント開催に向けた主な準備は、

- ・盆踊りの振付を覚える（本校が作成した振付ビデオをSNSで送った）
- ・アニメブースに等身大のキャラクターパネルの作成

- ・英語（マレー語）でのアニメの解説の作成

である。イベントまでに2～3度テレビ会議を繰り返し、準備を進めた。また、対面のテレビ会議で十分に議論することのできなかつたことに関しては、SNSを用いて互いに連絡を取り合い、詳細な内容を確認した。

【地元からの協賛を募る】

企画が具体的になるにつれ、様々なサポートが必要になることが明らかになってきた。生徒たちは笠岡市役所を事前に訪問し、イベントに向けた協賛をお願いし、展示に使うための写真素材などをいただくことができた。

【現地渡航】

2018年11月17日、会場（Dewan Jubli Perak in MPKB hall）入りすぐに、ブースの設置と盆踊りの練習を現地の高校生たちと進めた。14時からの開会式では、生徒代表がスピーチを行い、盆踊りの意味や楽しさを伝え、盆踊りに参加するように要請した。16時、20時の2度に渡って盆踊りを行い、1度目は現地の高校生を中心に、2度目は現地の一般人を勧誘し、盆踊りを開催することができた。また、ブースでは、緑茶をふるまい、現地の高校生が考案した日本のアニメのイラスト書きコーナーを催し、列が途切れることなく、人気のブースとなった。

イベント翌日の18日には、イベントを手伝ってくれた2校とこれから交流を始めたい別の学校（Faris Petra）の計3校を訪問し、盆踊りを一緒に踊るなど交流を図った。

3-3. 本活動におけるポートフォリオの利用

本事例では、Web上で個人の活動記録や掲示板、アンケート機能や情報保管をすることができeポートフォリオを活用した。生徒一人ひとりにアカウントを付与し、RLA用のページを作成した。

ポートフォリオへの入力は、RLAを受講している28人全員が5/19、6/2、6/16、8/6（夏休みの臨時）、9/8、10/15までの計6回で入力し、マレーシアに渡航した3名に関しては現地滞在時も入力を求めた。質問項目はオープンエンドな回答になることを意識した。

3-4. 本研究（本稿）のリサーチクエスションと研究デザイン

3-4-1. リサーチクエスション

ポートフォリオはそもそも「作品ファイル」を意味しており（鈴木 2010）、教育利用においても明確に項目が定められている訳ではない。学びを促すためのラーニングポートフォリオにおいては、「学習哲学」「学習業績」「学習証拠」「学習アセスメント」「学習の関連付け」「学習目標」「付録」を内容に含めることが重要とされている（土持 2011）のみであり（ただし高等教育における利用を前提とした議論において）、実際に活用する際には学習活動の領域固

有性を意識しながら実践者が柔軟に設定していく必要がある。

上記の領域固有性を意識した柔軟な入力項目に関する設定が求められていることに加え、中等教育におけるプロジェクト学習を通じた学校間交流に関してはポートフォリオに入力する項目の研究知見が十分に蓄積されていないと判断し、本研究においてはリサーチクエスチョンを下記の2つに設定した。

RQ1) 本国際協働プロジェクトにおいて、生徒は何を学んだのか

RQ2) 上記 RQ1) についてポートフォリオを使って可視化するためには、今後どのような質問項目を設定していく必要があるのか

3-4-2. 研究デザイン

本実践は、生徒だけでなく担当教員、そして研究者にとっても不確実性が高いものであった。マレーシアとの交流やイベントが実現するかどうかはこちらの交渉方法や内容、相手の都合・考えに左右され、また生徒たちの学び方や教師による支援方法に関しても決まったフォーマットは存在しなかった。教師は生徒とマレーシアの状況について注視しつつ、柔軟に授業デザインを改善していく必要があった。また、ISN2.0の指定校として先進的な実践に積極的に取り組む中で、その実践を学術的に分析し、知見を共有する必要があった。そこで、本研究ではRLAの実践が「実際の場に根付き、さらにその場を変革していく」要素を持ち合わせたアクション・リサーチ（秋田ら 2005）の特徴を持ち合わせていると判断し、教師自身がデータ収集・分析をしつつその結果に基づき改善を試みた。共同研究者としてISN2.0のリサーチャー2名が加わった。

本実践は2018年度から始まり、研究チームは適宜テレビ会議を実施して活動の状況やポートフォリオに蓄積しているデータに関しては情報共有を行ったものの、最も優先すべき事項は生徒の学びを実現するための実践を成立させることと考え、2018年度に関しては実践を中心に行い、2018年度終盤に1年間の活動に関するデータ収集と分析を行った。ここで明らかになった知見は、2019年度も続く国際協働型プロジェクトに活用し、アクション・リサーチを進めていく予定である。

3-4-3. 研究方法（データ収集）

本研究では、(1) 実行委員生徒へのインタビュー調査 (2) RLA 受講生への質問紙調査の2種類のデータを収集した。

(1) 実行委員生徒へのインタビュー調査では、実行委員4名のうちインタビューに応じる時間を設けることができた3名（女性生徒2年生2名、女性生徒1年1名：以下、生徒AB, C）にRLAでの学びに関する質問を行った。具体的には、「RLAに応募した際の心境」「RLAが始まった際の心境」「企画会議2回目までの心境」に加え、教師や実行委員、その他生徒とのやり取りやその際の心境について半構造化インタビューの形式を採用した。インタビューの所用時間は、平均して約30分である。

(2) RLA 受講生への質問紙調査では、第1回RLAへの参加に関して

Q1「1：授業なので仕方なく参加～5：イベントを成功させようと意欲に満ち溢れていた」 Q2

「Q1 の理由（自由記述）」

Q3「第1回 RLA に参加した時に感じたこと（自由記述）」

Q4「第1回 RLA への参加に関して1：授業なので仕方なく参加～5：イベントを成功させようと意欲に満ち溢れていた」

Q5「Q4 の理由」

Q6「第2回 RLA に参加した時に感じたこと（自由記述）」

の計6問の回答を求めた。

3-4-4. 分析・考察の方法

本稿執筆時においては、第1回～2回の RLA に関する半構造化インタビューしか実施していないため、KJ法を用いた簡易分析を行い生徒の学びについて検討を行う。

また、分析結果に基づき、そこでの学びを可視化し促すための方法について考察する。その際、質問紙調査の結果等を適宜引用する。

3-5. 簡易分析結果と考察

3-5-1. RLA 1～2回目における生徒の学びに関する簡易分析の結果

インタビューにおける生徒の発言に対してオープンコーディングを行い、似た意味をもつコード同士でカテゴリーを生成した。ここでは、その結果を報告する。

実行委員長を担っていた2年女性生徒（以下、生徒A）及び2年女性生徒（以下、生徒B）、1年女性生徒（生徒C）に問いかけた RLA への応募動機に関する質問において、3名の回答に共通していたのは①「マレーシア渡航に対する直接的／間接的興味関心」を持ち合わせていたことである。生徒Aの「私は元々海外にすごい興味があって・・・（中略）なんで行ってみたいっていうのは、すごいありました」や生徒Cの「（マレーシアに行って盆踊りをすることに対して）興味がないわけではない」や生徒Bの「別にそこまでじゃない（マレーシアに対する興味）けど英語はしゃべれるようになりたい」など、海外に一度も行ったことのない3名は直接的・間接的にせよ①「マレーシア渡航に対する直接的／間接的興味関心」を抱いていた可能性が示唆された。しかし、3名がマレーシアに対して興味関心を抱いていたからといって、必ずしも3名が運営委員に応募していたとは限らない。任意だったはずの企画書提出について生徒Cが「（企画書を書けという）宿題をだされて」と発言したように、生徒3名全員が②「教師による熱心な企画参加への促し」を自覚していた。つまり、①「マレーシア渡航に対する直接的／間接的興味関心」と②「教師による熱心な企画参加への促し」が本事例における学びのはじまりになっていた可能性があると言える。

イベント企画に関するインタビューで明らかになった生徒の学びに関する事項として、③「未経験や不得手」に関するカテゴリーを3名全員から確認することができた。このカテゴリーは、生徒一人ひとりが自分のまだ経験していないことや不得手なことを乗り越えたいという気持ちをもっている事を意味している。例えば、生徒Aは岡山龍谷校に入学してからの生活を振り返り、

生徒同士や教師と共に話し合っただけ何かを決めていく経験を「していない」と答え、RLAの活動では仲間や教師と共に「イベントの企画を進めていくみたいだ」新しい経験をしていると述べた。同様に、生徒Bの「人をまとめるのが苦手」という発言や自己を「大人しい性格だから、変えなきゃと思って」いたという生徒Cは、自分の意見が1回目の会議よりも2回目の会議でより多く言えるようになったことを振り返った。このように、RLAにおいては、③「未経験や不得手」を乗り越えることを通して生徒の成長が促された可能性が示唆された。

イベント企画のプロセスにおいて他者との関わりに関連する学びを示す事項として④「教師との協働による学びのオーナーシップの自覚」と⑤「実行委員以外の生徒との協働による学びのオーナーシップの自覚」の2つが挙げられる。④「教師との協働による学びのオーナーシップの自覚」とは、生徒がRLAにおける自分たちと教師の関係性を従来の「教える-教えられる」の関係性と比較しつつ、自分たちの学び手としてのオーナーシップを護ろうとすることを意味している。具体的には、生徒3名全員が、「先生が、ここにたどり着いて欲しいっていうゴールがあって(生徒B)」など教師が生徒に何を望んでいるのかを教師とのやり取りを通して感じ取っており、その中で「でも先生にあんまり手助けしてほしくない。先生が手助けしたら、もう先生の企画になる。それをやらされてる。私たちもやらさてる感じ(生徒A)」や「A先輩とB先輩は、先生が決めたゴールじゃなくて自分たちで目標まで達成したい、みたいだ(生徒C)」など自分たちの学びのオーナーシップを護ろうとしていた可能性が示唆された。ただし、生徒全員が「生徒が考える力と先生がサポートしてくれる力が同じくらいで(生徒C)」など教師との教える-教えられるの関係よりも協力関係を意識しており、④「教師との協働による学びのオーナーシップの自覚」には教師側からのバランスの良い関わり方が重要になる可能性が示唆された。

⑤「実行委員以外の生徒との協働による学びのオーナーシップの自覚」とは、主に実行委員以外のRLA受講生とのやり取りの中で生まれたものである。「積極的に自分からはこない。言ったらやるけど(生徒A)」や「(RLAの受講生との活動が)やりにくかった。あんまり発言してくれないし(生徒B)」などの発言は、実行委員の生徒とそれ以外の受講生との間に活動に対するモチベーションの違いがあった可能性を示唆している。そのような中で、生徒たちは「やりたいことをやらせてあげたい(生徒C)」など、自己及び仲間の生徒の学びのオーナーシップを自覚し、葛藤しつつも活動を続けていた可能性が示唆された。

このように、RLA1～2回目における生徒の学びは、①「マレーシア渡航に対する直接的／間接的興味関心」を持った生徒が②「教師による熱心な企画参加への促し」によって活動の中心となって取り組みをはじめ、④「教師との協働による学びのオーナーシップの自覚」と⑤「実行委員以外の生徒との協働による学びのオーナーシップの自覚」を通して③「未経験や不得手」を乗り越えていった可能性があると考えられる。

3-5-2. RLA 受講生に対する質問紙調査の結果

図3と図4は、1回目および2回目のRLA受講生の意欲を示している。N=28(ここは全受講者数)で、それぞれ有効回答数が22人と20人であった。

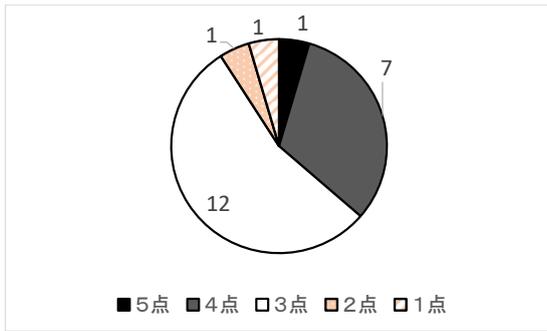


図3 RLA 1回目の意欲

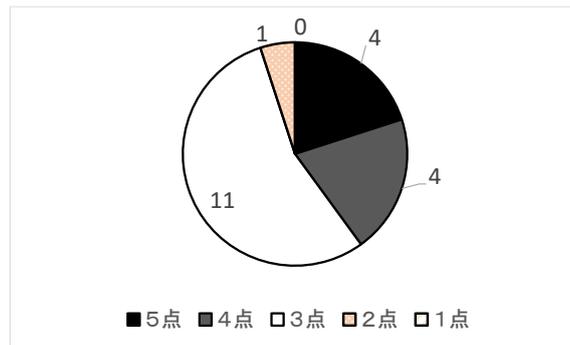


図4 RLA 2回目の意欲

自由記述で上記評価の理由について尋ねた結果、1回目の回答からは「強制だったから」や「すみませんが、あまり覚えていません。嫌々やらされたって感じではなかったと思いますが、意欲があったとも思えません」など低い意欲を示すコメントが確認できた。ただし、2回目からは「少しめんどくさいけど、マレーシアについて調べるのは面白かったから」や「盆踊りの計画とかを立てるのが楽しみだったから」などマレーシアについて知ることに對する前向きな意見がみられ、5点（イベントを成功させようと意欲に満ち溢れていた）を付けた数値がやや上昇した。しかしながら、「まだ外国が遠いものだと感じていて少し意欲が少なくなったから」や「これも記憶が曖昧なのでよくわかりませんが、1回目と大して変化がなかったように思われます」など大きな変化がなかったことを示すコメントも確認することができた。

3-5-3. 考察：本実践における学びを促すための質問項目

本国際協働プロジェクトの学習活動序盤の分析結果からは、ポートフォリオ上における次のような問いかけの必要性が考えられる。

- (I) プロジェクト学習に関わることの意義（学び①③に対応）
- (II) 自分がやりたいと考えていること（学び①③に対応）
- (III) 自分たち（生徒・教師）がやりたいと考えていること（学び④⑤に対応）

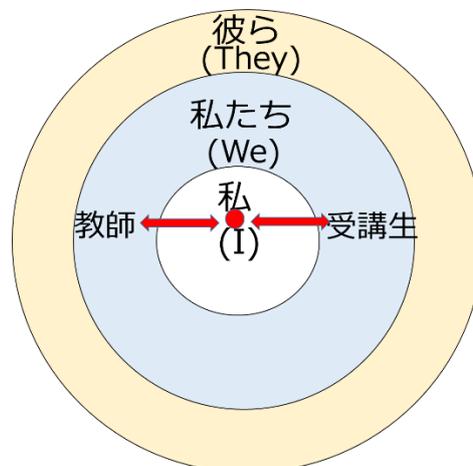


図5 自己と私たち，彼ら

図5は、上記(I)～(III)を示したものである。本実践における初期段階では、そもそも私が何を学ぼうとしているのか(I:図のI)について省察し、言語化する必要があると言える。そうすることで、自分がプロジェクトの中身に興味をもっているのか、それが自分の人生にどのような関わるのか、自分がどのような経験をし、どのような力を身に付けたいのか(II)を自覚することができる可能性がある。

(III)は私を取り巻く仲間、つまり私たち(図のWe)を意味する。特筆すべきことは、ここでは教師をTheyとして捉えるのではなく、Weとして捉えることだ。学びのオーナーシップを誰が取るのかという問いは、一般的な教科指導の中では生じない問いであると考えられる。つまり、ポートフォリオ上の問いかけにおいて、教師が意図していること、仲間を含めた自分たちがやりたいことを相互に記述・比較することで、学びのオーナーシップに関する自覚が生まれる可能性があると言える。

3-6. 課題と展望

本稿では、RLA 1回目～2回目という限られた実践について、3名の実行委員へのインタビュー調査と27名(28名のクラスから1名実行委員を除く数)を対象とした6問の質問紙の結果を簡易分析したものである。今後も継続的に分析を続けると共に、実際にポートフォリオ上の問いかけを修正していくことが必要であると考えられる。

参考文献

- 秋田喜代美, 恒吉僚子, 佐藤学 (2005) 教育研究のメソドロジー—学校参加型マインドへのいざない. 東京大学出版会
- 美馬のゆり. (2009). 大学における新しい学習観に基づいたプロジェクト学習のデザイン. 工学教育, 57(1), 1_45-1_50.
- 鈴木敏江 (2006) ポートフォリオ評価とコーチング手法. 医学書院
- 鈴木敏恵 (2010) ポートフォリオとプロジェクト学習. 医学書院
- 土持ゲーリー法一 (2011) ポートフォリオが日本の大学を変える-ティーチング/ラーニング/アカデミック・ポートフォリオの活用. 東信堂